HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍
Author(s)	北川, 誠一
Citation	北海道大學文學部紀要, 32(1), 109-161
Issue Date	1983-11-05
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33477
Type	bulletin (article)
File Information	32(1)_PR109-161.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍(1)

北川誠一

目次

緒言
第一章　シルヴァーンのモンゴル軍
　第一節　イル＝ハン国初期のスィバ
　第二節　シルヴァーン駐屯軍
　第三節　イル＝ハン国後期のスィバ
　第四節　イル＝ハン国末のダルバンド防衛軍
第二章　グルジスターンのモンゴル軍
　第一節　スニト部万人隊
　第二節　ケレイト部千人隊
　第三節　トカルとクンチュクバル
　第四節　スルドゥス部の軍隊とチューパーン家のグルジスターン支配
第三章　シルヴァーン＝シャー国、グルジア王国の自立
結語

緒　言

一二五六年フラグ＝ハンに率いられてイランに入った十万に及ばんとするモンゴル軍は、一二五六年のイスマーイール派、一二五八年のアッバース朝、一二六〇年のシリア等に対する作戦終了後も、モンゴリアに帰還することなくそのままイランに駐屯し続けた。フラグはシリアから帰還すると北西イランに本拠を定め、事実上イル＝ハン国を樹立した。この国家の首府は、最初マラーガ、次にタブリーズ、後に十四世紀にスルターニエに置かれた。これらの都邑は、イル＝ハンの夏冬の遊牧地の途中にあり、麾下のモンゴル軍は北西イランを中心に、ハンの遊牧地と首府を取りまくように、イラン各地に駐屯地を指定されたのである。

イル＝ハンは、支配地をモンゴル人王侯諸将に分割することをおこなわず、土着民に対する徴税行政[1]とモンゴル軍人に対する指揮、統制とを厳然と区分していた。しかし、それにもかかわらず、モンゴル軍の駐屯は、土着社会に政治的社会的、経済的に重大な影響を及ぼした。

第一に、軍隊は、モンゴル人のシャフネ(ダルガチ)、多くイラン人の知事、徴税官の背後にあって、[2]土着民の動静に有形無形の圧力を加えていた。一旦住民にイル＝ハンに対する叛意が認められた場合、真先に鎮圧に派遣されるのは、その地方に遊牧地を有する軍隊であったからである。

第二に土着地方領侯、名望家とモンゴル人貴族間の通婚によって地域的な閨閥が形成された点を挙げることができる。これは両者の政治的関係の原因よりは、むしろ結果であるにしても、イル＝ハン国末期以後の地方政局分析の重要な要素となった。

第三に、モンゴル人は、単に軍人とその家族の集団であっただけではなく、基本的には自らの再生産のシステムを維持していた牧畜民であった。彼等はガザン＝ハンの改革に至る以前は、軍人としての給与を与えられなかったのみならず、かえって飼育する家畜に税を課されていたのである。[3] 先住者によって農耕、牧畜が行われていた地域は、新たにモンゴル人の遊牧地が設けられたため、大いに混乱や打撃を被ったであろう。

第四に、イクター制が実施され、モンゴル軍人に農地の占有（より厳密には特定の農地の生産物に対する徴税権）が許される以前はモンゴル人は農地を有していなかった。従って、彼等は農産物と手工業製品を得るために、経済的にであれ経済外的にであれユルト内外の農村、都邑と流通上の関係を有していたとしなければならない。そしてイクター制実施後は、両者の結びつきはいっそう強固になったであろう。

第五に、モンゴル人のユルトの設定、及び彼等の定住農耕民化は、西アジア各地特に北西イランの民族形成史の重大な要素である。モンゴル正規軍中には多数のトルコ系部族が含まれていて、彼等の定着は、その地域住民のトルコ化過程に一時期を画したであろう。[4]

以上のような観点からイル＝ハン国史を論述するには、最も基礎的な研究としてイル＝ハン国各地のモンゴル諸部族の分布を明らかにしなければならない。本田実信「イルハンの冬営地・夏営地」は、歴代イル＝ハンの遊牧地を明らかにし、北西イランのアッラーン、ムガーン、アーゼルバーイジャーン、大アルメニアがフラグ＝ウルスの『腹裏の地』(qolun ulus) であることを証明するものである。[5] これらの地方には、モンゴル軍が重点的に配備され、オルドを中心に諸王、諸部族の遊牧地が割当てられたと思われるが、本田論文はその個々には言及していない。

ミノルスキー V. Minorsky は、アーゼルバーイジャーンの地名からモンゴル語起源のものを収集し、[6] スルドゥス

Suldus、オイラート Oyrāt、ベクリーン Bekrīn（或いは M. Krīn, M. Krīt）等の部族の駐屯地を比定した。この研究は現在の地名とイル＝ハン朝の年代記に見えるものを対照したものであるが、ミノルスキーが用いた『イラン地名辞典』の如き大規模な公刊資料の得難い今日のソ連領[28]及びトルコ領諸地域、すなわち伝統的呼称によるアッラーン、ムガーン、シルヴァーン、グシュタスフィー、大アルメニア、グルジスターンについては別の方法に拠らなければならない。

ところで、北西イランはイル＝ハン国には本土でありながら、同時にキプチャク＝ハン国との係争地で前線であるという事情にあった。キプチャク＝ハン国は、チンギス＝ハンがジョチに「モンゴルの軍馬の蹄の至る限り」の西方の地を与えたとして、アッラーン、アーゼルバーイジャーンの領有権を主張したからである。歴代のイル＝ハンは北辺に軍隊を配置してキプチャク＝ハン国軍の南下に備えたが、この前線防備と両国間の征戦を巡って、シルヴァーン、グルジスターン地方守備軍の内、若干のものについては遊牧地を知ることができるのである。

小稿は、イル＝ハン、キプチャク＝ハン両国関係と、イル＝ハン国内の事情に注意を払いつつ、イル＝ハン朝、チムール朝のペルシャ語宮廷年代記、現地のグルジアの年代記によって、シルヴァーンとグルジスターンのモンゴル軍配備、すなわち部族遊牧地設定の状況について知るところを述べるものである。

なお、グルジスターンは、グルジア（ジョルジア）のペルシャ語名称であるが、十三－十四世紀のグルジア王国の領土は太古よりグルジア人が居住していたグルジア固有の領域とは異るので、ここではグルジスターンの称を用いた。

第一章　シルヴァーン地方のモンゴル軍

イル＝ハン国第七代の君主ガザン＝ハンは、軍規粛清をめざすある勅令の中で

我が国々の辺境は、ホラーサーン Khurāsān、ファールス Fārs、キルマーン Kirmān、バグダード Baghdād、ディヤール・バクル Diyār Bakr、ルーム Rūm、ダルバンド Darband、である（Рашид/Ализаде, III, 517）

と述べ、国防上の重要地域の一つにダルバンド[7]を挙げている。ダルバンドは、狭義には大コーカサス山脈がカスピ海に没する南北交通の隘路に存する一都邑名で、いずれの側の軍隊も敵国に侵入するためには、先ずダルバンドを制して、通過する必要があった。また広義には、この周辺の地域、さらにはシルヴァーン地方全体を指した。今、一二六二－三年、一二六五－六年の両国戦役の概略を記して、少しく戦略の実例を示そう。

先ず、一二六二年夏、キプチャク＝ハン国軍の前衛ノガイ Nūgāy は、ダルバンドを容易に突破してシルヴァーン地方に至った。その時フラグ＝ハンは、アーラータグ Ālā Tāq の夏営地に居たが、一二六二年八月二〇日前衛としてシラムン Shīrāmūn＝ノヤンを派遣し、自らも前線に向った。シラムンはサマグル Sāmāghūr＝ノヤンと共に十月一七－十一月一四日、シルヴァーン地方の主邑シャマハ Shamāḫā でノガイ軍と衝突し、撤退させた。一一月一四日、アバタイ Abatāy＝ノヤンの率るイル＝ハン軍増援部隊はシャーバラーン Shābarān 近郊でノガイ軍を強襲した。フラグはノガイ軍の跡を追って、一一月二〇日シャマハへ出発し、翌月一二月八日ダルバンド城を再占領した。イル＝ハン軍は一二月一五日ダルバンド市の北で再度ノガイ軍に勝利した。シラムンとアバタイは追撃を続けてテレク河に至り、渡河してベルケのオルドを掠奪した。翌一二六三年一月一三日、ベルケ＝ハンが同河左岸に現れた。イル＝ハン軍退却の際河の氷が割れ、多くの将兵が死亡した。この敗北によってイル＝ハン軍は一斉に退却し、フラグ自身は、バルダ Barda' 経由で三月二三日タブリーズに帰った。戦闘は自然に停止した[8]。

次に、一二六五年一月九日、フラグは、ウルミヤ湖東方のチャガトゥ Chāghātū の冬営地で死亡し、長子アバガが汗位を継いだが、ベルケはこの間の政治的混乱に乗じて再度イル＝ハン領に侵入した。この度の戦役にも先回と同じくノガイが前衛として派遣された。同年七月一九日新ハンの弟ヤシュムト Yashmūt は勅令を奉じてノガイ軍撃滅のためにクル河を北に渡り、アクスー Aqsū 河で侵入軍を迎撃した。一二月一日、ノガイは戦闘中片目に矢を受けて負傷し、シルヴァーンに撤退した。アバガ自身もノガイ軍撤退後クル河左岸に渡ったが、ベルケ本軍の接近を知って、クル河を再び渡りアラーン Arrān に引き返した。ベルケはアラス河合流点の近くでクル河渡河を計画したが、イル＝ハン軍の抵抗に阻れ、ティフリース Tiflis（トビリスィ T'bilisi）付近での渡河を望んで北西に進んだものの、同市近郊に至って病に倒れ、撤退の途中死亡した。(9)

この二度の戦役を見ると、ダルバンド城は最前線に位置する軍事上の要所ではあったが、ここの攻防が戦局に占める意義は少く、いずれの側も容易に突破し得た。キプチャク＝ハン国軍が、一旦イル＝ハン領に侵入した場合、主要な会戦はクル河付近でおこなわれたのであるから、イル＝ハンにとってクル河こそが戦略上最も重要な地点であった。

ドーソンは、『集史』「アバガ＝ハン紀」の記事に拠って、一二六三年ベルケの撤退後「アバガはクル河の彼方に、ダラン・ナウル Dalan̄ (Valan̄) naour から、デシュト・クルディアン Descht-Kurdian まで、広い堀に囲まれた壁を設けた」、と述べる（d'Ohsson, III, 419；佐口訳、第五巻、八-九頁）。アリザーデ博士は、自ら校訂したテキストで、「クルデアン」を「K. r. d. mān」と正して（Рашид/Ализаде, III, 419）、ゲルドマン Гердман と読み、現在のアゼルバイジャン共和国イスマイル区（ライオン）に存する地名であると解した（Ализаде, *Социально-экономическая...*, стр. 321）。すなわち、アバガはクル河に直角に「堡塁（スィバ）」を設けたとする。一方故ボイル教授は、この「城柵（sibē）」

が、「クル河左岸に沿って」建設され、この西端にダラン＝ナウルが存したものとする（Boyle, *Dynastic history*, p. 356, 374）。三者共に主として、『集史』「アバガ＝ハン紀」の記事に拠りながら、比定された位置は異る。先ず、クル河防衛の要であった「スィバ」[10]の設置場所を明らかにし、次にそこに配置された軍隊について論じよう。

第一節　イル＝ハン国初期のスィバ

アバガの事績を述べる前に、フラグが防衛のためにとった処置を明らかにする必要があろう。

ラシードッディーンによると、一二六二－三年の戦役の後、フラグは戦闘の再開を予想して、全軍に武器と糧秣の用意を命じ、国境防備のためにシリア方面の前線ディヤール・バクル、ディヤール・ラビーア Diyar Rabi' にアミール＝トゥダウン Tūdā'wn を、東辺ホラーサーン地方に長子アバガを派遣し、更にダルバンド方面には、

スィバ Sibah の岸に至るまでのアッラーンとアーザルバイジャーンをヤシュムトに託した（Рашид/Ализаде, III, 91）。既に一二六三年のことを記した記事に「スィバ Sibah」の名が見え、フラグは二子ヤシュムトをスィバ以南の地方に置いたのである。また、『集史』には、一二六五年二月フラグの死が報じられると

ヤシュムトは、彼に属していたダルバンドとアッラーンの諸王国におり、父の死から八日目に（フラグが歿したチャガトゥ冬営地に）到着した（Там же, 100）、

とある。ここに言うダルバンドは地方名でシルヴァーンに同じであり、戦後一、二年の内にヤシュムトはこの地方を再び確保したのである。スィバはシルヴァーン、アッラーン両地方の間に置かれたように察せられるが、グルジアの年代記に、一二六三年の戦闘終了後の記事に次のように言う。

①一〇月が近づくと、フラグはグルジアの隣国シルヴァーンのチャラン・ウスリ Tchalan Ousouri すなわち白い河と呼ばれる場所に行った。そこの流れの岸にテントに周らした囲いを設け、それをスィバ Siba と名づけた。要するにベルケ＝ハンの侵入を予期したのである。その時以来グルジア人とタタール人は一〇月から、夏の住地に出発する春までそこに留るようになった (Brosset, I, 569)。

②グルジア人は白い河のほとりに柵を備えた囲いを設置し、既に述べたようにそこで冬を過した (ibid., 571)。

③一〇月が来るとハン(フラグ)はスィバに行き、王(グルジア王ダヴィティ)はそれに伴われた。次の春彼はサコ Saco[11] (スィヤーフ・クーフ Siyāh Kūh) に行った (ibid., 571)。

スィバが設けられたと言うチャラン・ウスリ(モンゴル語 Chaghan Usuri)とは、トルコ語のアク・スーで、シャマハ西方を流れる河川に他ならない。先述のように、一二六五年再びノガイに率られたキプチャク＝ハン国軍が侵入すると、ヤシュムトは七月一九日に出陣してクル河を渡ったが、『集史』には、

アク・スーと呼ばれているチャガン・ムランの近くで両軍は衝突した (Рашид/Ализаде, III, 104)

とある。この戦闘でノガイが負傷、キプチャク軍は撤退したので、イル＝ハンは、スィバで侵入軍を撃退するという所期の目的を達することができた。

フラグはアバガに先だってアク・スーに城柵を設けたが、その年次は、先に引用した『集史』、グルジア語年代記『モンゴル人侵入史』の記事から判断して一二六三年のことと見られる。またスィバなる語の元来普通名詞であることからして、当時既にこの名で呼ばれたであろうと思われる。またこの防御施設は、『モンゴル人侵入史』に「テントに周らした柵」とあるから、極く簡略なものであっただろう。

次に『集史』「アバガ・ハン紀」には、ベルケ軍の撤退後の記事に

六六四(一二六五年一〇月一三日-一二六六年一〇月一日)年、アバガ＝ハンはクル河のあちらの方面に、ダラン・ナウルから、ガルドマーン K. r. d. man の平原まで、クル河に接してスィバ Sipah (sic.) を設置し、深い堀を堀るように命じた。モンゴル人とイムラーム教徒がその防衛のため駐屯し、諸方面から隊商がその近くに来た。(Рашид/Ализаде, III, 104)

とある。また、『ヴァッサーフ史』には、

この後、アバガ＝ハンは、彼等の軍隊と志気の大なることを知ったので、その世界を恐れさせる軍隊の侵入を妨げるために、ダルバンドのこちら側に一城壁 divārī を引いた (Vaṣṣāf, 51)

とあり、キリキア・アルメニアの王族にして歴史家のヘトゥーム Het'um も (Hayton, 216)

アバガはスィバ Ciba と呼ばれる所に実に一日行程の堀と他の塹壕[12]を造った。そこには通路を守る軍隊が置かれた。

とある。ダラン・ナウルはアラス河との合流点に近いクル河下流域であり、ガルドマーン(ゲルドマーン)は、アリザーデ教授が述べる如く、アク・スー及びこれと平行してクル河に流入するギルドマン・チャイ Гирдман Чай 上流域の称である。両者の距離は約五〇キロメートルで、ヘトゥームの記す一日行程に一致する。[13]

グルジアの年代記は、フラグのスィバとアバガのスィバについて何らの区別をなさず、また、『シャイフ＝ウヴァイス史』には、アブー・サイード＝ハンが、キプチャク＝ハン国のウズベク＝ハンの侵入を阻止するためにアク・スーに防衛部隊を設置した記事が見えるので (Ahrī, p. 157)、アバガのスィバは、フラグのそれと同じくアク・スー岸に建設

されたとすることができる。

さて、一二六五年の戦役においてベルケ＝ハンの率る大軍がクル河左岸に到着すると、アバガ＝ハンは対岸に防衛線を引いて敵軍の渡河を妨げた。アルメニア人僧侶キラコス・ガンゾァケッツィ Kirakos Gandzaketsʿi は、

双方は、向きあって、城壁と堀で防備した岸辺に布陣した（Ханларян, 237）

と記し、アルメニア人のヴァルダペット（博士）ヴァルダン Vardan Vardapeti も

そこに置かれていた（イル＝ハンの）軍隊は、おじ気づいてその場所に布陣し、シパル Shipar と呼ばれる堅固な塹壕を岸辺全体に沿って堀上げ、そして防備のためにあらゆる種類の用意を整えるのにその冬を費した（Dulaurier, Octobre-Novembre, 310）

と記す。クル河右岸沿いに防御陣地が築かれ、これは「シパル」[14]と呼ばれたのであるが、明らかにアク・スーに沿って設けられたスィバとは別のものである。[29]

フラグのスィバは、ノガイ軍を退けることができたものの、ベルケ自身の率いる大軍に対しては持ちこたえることができなかった。アバガは、フラグのアク・スー防衛策を受け継ぎ、単一の軍事基地に過ぎなかったフラグのスィバよりはるかに大規模で、ダラン・ナウルよりガルドマンに至る長さ約五〇キロメートルに及ぶ大規模な城柵を設けたのである。

『集史』「アバガ＝ハン紀」には、スィバが築かれ、アバガは

ダルバンドの国事から心が解放されたので、王子モンケテムル Möngke-Temür を、サマグル＝ノヤン、オルジャイ Öljai＝ハトゥンと共に残し（Рашид/Ализаде, III, 104）

てホラーサーンに向い、その冬はマーザンダラーンで過したとある。これと同じことを述べて、『シャイフ＝ウヴァイス史』には、

アバガ＝ハンはクル河の岸とダラン・ナウルからガルドムーン K. r. d. mūn の平原までには、諸王子、サマグル、モンケテムル、ウルジャイ＝ハトゥンが駐屯し、その場所が彼等の冬のユルトであるように命じた（Ahri, 135）

とある。ウルジャイは、フラグのハトゥンであったが、父の死後アバガが娶っていた。モンケテムルは、ウルジャイが生んだフラグの第十一子で、一二五六年一一月生れ、当時一〇歳であった。（Рашид/Ализаде, III, 12; 96）従ってモンケテムルは、何らかの国事の遂行を命じられたのではなく、ウルジャイのオルドがスィバに留められたので、母のもとに存ったに過ぎないであろう。従って古参の大将軍（amīr-i buzurg wa qadīm）であったサマガルが駐屯を命じられたのは、国境防備のためというよりは、むしろオルド警護のためであったであろう。[15] ウルジャイのオルドは、一二八九年アルグン＝ハンが反乱を企てたブカ＝チンクサン Būqā Chinksānk の逮捕を命じると、ブカは自分の家から避れて舟でクル河を渡りウルジャイのもとに保護を求めているので（Рашид/Ализаде, III, 213-214）、クル河左岸に置かれていたことが明らかである。

ラシードッディーンは、スィバに「モンゴル人とイスラーム教徒」[16]を置いて防備に当らせたと記すが、フラグの時代と同じく、グルジア兵も駐屯を命じられた。『モンゴル人侵入史』には、一二七〇年から翌一二七一年と思しき記事に（Brosset, 584）

この後、ハンは、王ダヴィティを伴ってスィバに行ったが、王はそこで冬を過した。春が戻ると彼等は出発したが、王は腹の病に冒された。

とある。グルジア王ダヴィティ四世のみならず、アバガもこの冬をスィバで過したとするが、イル＝ハンの冬営地ダラン・ナウルがクル河左岸にあったことを想起すべきであろう。

スィバはクル河左岸のウルジャイ＝ハトゥンのオルドを防備する位置に設けられたのであるから、防御施設が築かれ、モンゴル人、イスラム教徒、グルジア人の軍隊が駐屯を命じられていて、本土決戦の際には重要な戦略的拠点たり得るとはいえ、これを国境の前線基地とは称し難く、ここに第一線部隊が置かれていたとは考えられない。

第二節　シルヴァーン駐屯軍

それでは、ダルバンド防備の第一線部隊はどのように配置されていたのであろうか。『集史』「アバガ＝ハン紀」には、アバガは即位式の後、

先ず、弟ヤシュムトを全軍と共に、その辺境を敵から監視するために、アルターン Altān[17] 地方に至るダルバンド、シルヴァーン、ムガーンの地方に派遣した（Рашид/Ализаде, III, 102）

とある。アバガのキシュラークの地に定められていたアッラーン地方の東及び北東のムガーン、シルヴァーン両州にヤシュムトのユルトが置かれたのである。先に述べたようにフラグ生前に彼のユルトは、シルヴァーン（ダルバンド）とアッラーンであったから、この時ムガーンを得てアッラーンを失ったのである。これは、アバガの国境防備策の整備を意味しよう。

ヤシュムトが、一二七一年七月八日死亡した後（Рашид/Ализаде, III, 102）誰に彼の地位とユルトが受け継がれたかは知られない。一二八八年及翌一二八九年のトレブカ Töle-Buqa＝ハンの軍隊の小規模な侵入に対して、其々ブカ＝

チンクサンとクンジュクバル Qunjuqbāl' トゥカル Tūkāl とクンジュクバルが前衛として派遣された (Рашид/Ализа де, III, 208; 221) が、地位からして彼等が辺境防備軍の指揮官であったとは考え難い。

ガザンはハンの位に即くと、多くの財政上の改革を実施したが、軍規刷新、辺境防備体制の強化にも意をつくした。先ず、コーカサス方面の防衛については、『集史』「ガザン＝ハン紀」に次のようにある。

(ガザン＝ハンは)六九七年ズル・ヒッジャ月三日(一二九八年八月十二日)アミール＝ヌーリンをダルバンド方面防備のためにアッラーン地方に派遣した (Рашид/Ализаде, III, 328)。

発令地はタブリーズでガザンの次の冬営地はバグダードが予定されていた。[18] 次に、四年後の七〇一年ズル・カアダ月(一三〇二年六-七月)ウジャーン Ūjān で発布された勅令には、

アミール＝ヌーリンは、先に定めたとうり、軍と共にアッラーンに駐屯して冬営し常にその方面にいるように (Рашид/Ализаде, III, 348)

とある。次のガザンの滞在地はバグダードであった。この同じ時、クトルグシャー Qutlugh-Shāh が、グルジスターンの守護を命じられている。一三〇三年二-三月ヌーリンが任地アッラーンの冬営地で死亡すると (Там же, 353)、同年一一月二二日(七〇二年ラビル・アッワル月末日)

アミール＝クトルグシャーは、ユズ・アガチ Yūz Aghāj からアッラーンの冬営地に戻りその方面を防備するように (Там же, 360)

との勅令が下った。ガザン＝ハンは、とりわけ、自分がアッラーンの冬営地に不在な折の留守居役として、ヌーリン、クトルグシャー[19]を任命したのである。従って、彼等が前線司令官に任命されたとも、ガザンはシルヴァーンを放棄して

クル河の線まで後進したとすることもできない。

ムスタウフィーの『心魂の歓喜』「地理編」には、シルヴァーンについて

イクターとして多くの地方が、分割されている（Mustaufi/Dabīr Siyāqī, 107）

とあり、グシュタスフィーの項にも

そこに住む軍隊のイクターとして分割されている（ibid., 208）

とあって、シルヴァーン、グシュタスフィーには、モンゴル軍人のイクターが設定されたことが知られる。また後者には、実際に軍隊が住んでいたと明記されている。

ところで、七〇一（一三〇／二）年冬、ガザン＝ハンはクル河の北に巡行し、「シルヴァーン、ラクズィスターン Lakzistān」の山中で狩猟を行った（Рашид/Ализаде, III, 345）が、『集史』「ガザン＝ハン紀」には、

長い間堅固な山中に潜んでいたラクズィスターンの諸将は、その時、従い、自発的に降り来って、心から服従したとある。また『ヴァッサーフ史』には、七一八（一三一八／九）年、ジュチ＝ウルスのウズベク＝ハンがイランに侵入した時

アミール＝タルムターズ T. r. mtāz[20]が、Khāṣṣ の千人隊とともにラクザナート Lakzānāt の諸部族鎮圧と、その方面守護のために派遣されていた（Vaṣṣaf, 635）

とある。ガザンの治世期にラクズィスターン（ラクザナート）に対するイル＝ハンの支配権が伸長したのである。中世のアラブ語、ペルシャ語文献に見えるラクズは、今日のレズギ Lezgi, Лезг, Лезгин に同じである。現在レスギ人の大部分は、ダルバンド以南のダゲスターンに住むが、孤立した居住域がアゼルバイジャン共和国北部に点在するところか

ら、かつては今日よりはるか南方にまで勢力を広げていたに違いない。従って「シルヴァーンとラクズィスターン」の山々とは、アゼルバイジャン共和国大コーカサス地区の山地であろう。すなわち、シルヴァーン、グシュタスフィーにイクターを有していたモンゴル軍のヤイラークはこの地域に置かれ、従って彼等はクル河支流或いはスムガイト Cymr-aur 河本支流に沿って夏冬の移動を行っていたと思われる。これがダルバンド守備の第一線部隊であろう。

第三節　イル＝ハン国後期のスィバ

ウルジュイト＝ハンの時代には、モンゴル帝国のハン達の間に和平と再統一の気運が生じたが、ウルジェイト（一三一六年）、トゥクタ（一三一二年）、エセンブカ（一三一八年）と、相い継いで所謂西方の三ハンが死亡すると、イル＝ハンとキプチャク＝ハンの間に戦争が再開された（cf., d' Ohsson, IV, 614 佐口訳第六巻二七四-六頁 Howorth, part 1, div., 2, 156-157, part 111, 590; Boyle, 408）。

七一八（一三一八／九）年、ウズベク＝ハンは自ら大軍を率いてイル＝ハン領に侵入した。イル＝ハン側の第一線部隊は敵軍の強大さを知って撤退し、オルドに情況を報告した。『シャイフ＝ウヴァス史』には、

ウズベク＝ハンは、……ダルバンドを過ぎ、シルヴァーンに来て、クル河の岸に至るまで掠奪を行った。川の向う側にいて渡ることのできなかった人々（irkūnī〈Mong. irgen ?）は彼等の手に捕われた（Ahrī, 150）

とある。また、『集史続篇』には、アブーサイドのもとには一千騎の兵士が残されていただけであったので、オルドの小姓、騾馬引き、駱駝番等をクル河の岸辺に集め

人々がクル河の岸に真直ぐな線のように続けてテントを張るように命じ（Ḥāfiẓ-i Abrū, 134）

手元に大軍がいるかのように見せかけ、アミール＝チョバン Chūpān の援軍来着を待った、とある。すなわちこの時アブーサイド＝ハンには、スィバ防衛の準備が整っていなかったのである。

アブーサイドの存命中ウズベクは再度イラン侵入を企てたが、『シャイフ＝ウヴァイス史』には、七三四（一三三三／四）年

このあと、ウズベクの軍隊の音声が上がった。帝王はバグダードとディヤール・ラビールの軍隊の一団がその年アッラーンに行き、アク・スーに駐屯するよう命じられた（Ahrī, 157）

とある。依然としてアク・スーがすなわちスィバが国防上の重要地点であり、ここに兵力を投入してキプチャク＝ハン国軍のクル河渡河を阻止しようとする政策が採られていたのである。この時、アブーサイド自身もアッラーンに向ったが、ウズベク軍来寇を待たず一三三五年一一月一七日カラバグで死亡した。アブーサイドに替ってアルパ・ケウン＝ハンがこの侵入に対処したが、『集史続篇』には、七三六（一三三五／六）年

その冬アルパ＝ハンは、ウズベク＝ハンがアブーサイドの諸国を欲していたのでダルバンドに軍隊を派遣していた。彼が装備の整った無数の大軍と共にクル河に到着すると、あちら側からもウズベク＝ハンの軍隊が河岸に到着していた。渡ることのできる各所を占領し、諸方面より各々誉れある軍隊は、大将軍達と共にウズベク＝ハンの背後を断ち、勇気を持って彼等を待ち伏せるよう心せよと命令が下った（Ḥāfiẓ-i Abrū, 191）

とあり、『シャイフ＝ウヴァイス史』にも、ウズベク＝ハンは、

再びイランを目差し、ダルバンドを通過してクル河の岸に来た。アルパ＝ハンもまた軍隊を率い、対峙して下馬した（Ahrī, 158）

とある。しかし、この時にはアク・スーで侵入軍を迎撃することには触れられていない。

アブーサイドの時代まで採用されていたスィバ防衛策は、アルパ＝ケウンの時代には採られなかったのである。

第四節　イル＝ハン国末のダルバンド防衛軍

アブーサイド＝ハンは、即位後各地の守護のために部将を派遣したが、『シャイフ＝ウヴァイス史』には

Bāb al-abwāb には B. r. z. n. ki が (Ahri, 150)

いた、とあって B. r. z. n. ki なる者がバーブル・アッバーブすなわちダルバンド方面駐屯を命じられていたのである。また、ヴァッサーフも、ウズベク＝ハンの最初の侵入の際に、アミール＝タルムターズがレズィギスターンに派遣されていたが、(Vaṣṣāf, 635)

(ウズベグの)軍隊の攻撃を知ったが、踏み留まる力を持たず、すべなくオルドに向った。途中その事件の連絡のために前進していたアミール Z. n. gi は彼と出逢い(敵の)軍隊の大きさについて報告した

と述べる。ヴァッサーフは、ガザン死亡時にガザンの大アミール・クトルグシャーより数えて一一番目、ウルジェイト即位式には一四番目の高位の武将として T. r. m. tāz の名を挙げ、彼がガザンの近臣(khāṣṣ)であったと記す (Vaṣṣāf, 337, 456, 468, 471)。

また、カーシャーニーも、彼がガザンの

側近で近侍 (muqarrab va ināq)

であると述べ (Qāshāni, 94)、ウルジェイトの大将軍達 umarā'-i buzurg の一六番目に名を挙げて、ウイグル人であ

ると述べる（ibid., 9）。

またヴァッサーフは、ガザンの鷹匠（Qushchi）の一人に Z. n. gi の名を挙げ、（Vaṣṣāf, 457）アブーサイドの万人隊長の一人に T. r. mtāz と共に Br. . z. n. gi の名を挙げる（ibid., 622）。Z. n. gi と B. r. z. n. gi は同一人物であろう。

アブーサイド＝ハンの時代に二人の万人隊長 T. r. m. tāz 及び（B. r.）z. ngi がシルヴァーン州に派遣されており、前者が南、後者がダルバンド市に近い北部に駐屯していたのである。

『シャイフ＝ウヴァイス史』には、一三二七年のチューパーン一族の失脚後

ダルバンドは Iqinji に与えられた（Ahri, 155）

とあって、人事の移動が行われたようである。一三三六年に再度侵入したウズベク＝ハンと戦った部将（シャイフ＝チューパーン Shaikh Chūbān ハッジー＝ハムザ Ḥājji Ḥamzah、ハマーリー Khamāri）の中には、イキンヂの名は見えないものの（Ahri, 158）、同年ムハンマド＝ハンが即位すると

シルヴァーンと前衛の万人隊（tūmān-i qarāūl）をイキンジの息子シャイフ＝チューパーンに与えた（ibid.,164）

とあり、この地方の軍隊が前衛の万人隊とよばれシャイフ＝チューパーンは、イキンジの息子で彼の地位を継いだことが知れる。

またスレイマーン＝ハンの在位の晩年に、『シャイフ＝ウヴァイス史』には、チューパーン朝のマリク・アシュラフを

イキンジの万人隊を与えられていたマリク・アシュラフ（ibid., 168）

と呼び、このマリク・アシュラフがタブリーズに入城する際（一三四三／四年）

ヤーギーバスティー Yāghī Bāsti シャイフ＝チューパーンとフサイン・アバンガイ Ḥusain Abanghāy は、マリク・アシュラフに合流した (ibid., 171)

とある。すなわちシャイフ＝チューパーンの万人隊は、マリク・アシュラフの麾下に編入され、シルヴァーンから移動したのである。しかし、マリク・アシュラフはタブリーズに入城する前に彼らを殺した。

一三四六／七年マリク・アシュラフは、シルヴァーンシャー＝カーヴース Kāvūs 膺懲の軍を出したが、カーヴースは、遠征軍阻止のためクル河の渡河点を固めたので、マリク・アシュラフの軍隊は渡河できず撤退した。また、ウズベクの子ジャニベク＝ハンは、一三五六／七年イランに侵入したが、イラン側軍隊の抵抗にあわずクル河を渡った (Ḥāfiẓ-i Abrū, 244; Ahrī, 177)。

これらの事実は当時クル河左岸には、モンゴル軍が存在していなかったことを示すものである。

第二章　グルジスターンモンゴル軍

アク・スーに設けられたスィバには、実戦部隊が配置され、ジュチ＝ウルス軍の侵入に備えられたが、軍隊の駐屯は冬期間に限られたことは既に述べた。この地域は冬一日の平均気温零度前後と温暖であるが、七月には平均気温は二五度まで上昇するし、また、降雨量も少く、遊牧には不適となる。遊牧民はクル軍本支流を溯って冷涼な夏の牧地に移動しなければならない。[21] ここでは、ジュチ＝ウルスに対してやはり第一線にあたるグルジスターン州(グルジア、ジョージア)にユルトを持っていたモンゴル軍について述べよう。[22]

第一節　スニト部万人隊

『集史』「アバガ＝ハン紀」には、アバガ即位後に行われた官職授与の記事に、

グルジスターンには、チョルマグン Jūrmaghūn の息子シラムン Shīrāmūn を派遣した（Рашид/Ализзде, III, 102）

とあって、シラムン＝ノヤンがグルジスターンに駐屯を命じられている。『モンゴル人侵入史』には、一二六九年夏、チャガタイ家のテグデル王子がアバガに叛いた時、グルジア、サムツヘ Samtskhe の領侯サルギス・ジャケリ Sargis Jaqeli は、（Brosset, 1, 576）

自分の軍隊の先頭に、アルタン Artan の山々に宿営に行く途中であったチョルマグンの子で勇敢かつ大胆な戦士シラムン＝ノヤンと他のノヤン達を配置した

とある。アルタンはアルダハン（Ardahan, Ардаган）に同じで、現トルコ領のカルス地方の地名である。ここにシラムンのヤイラークが存したのである。

シラムンの父チョルマグンは、スニト Sūnit 部の人で、オゴタイ＝ハンがジャラールッディーン＝ホラズムシャー追討のため北西イランに派遣した探馬赤軍の指揮官であった。チョルマグン自身のユルトは、冬営地がムーガーン、夏牧地がセヴァン Sevan（ギョクチャ Gökça）湖周辺の山地であり、また一二四二年ごろ彼に替って指揮官の地位についたバイジュ Bāijū＝ノヤンのユルトは、、アラス河支流アケル Aker 河流域で、夏は上流のスィスィアン Sisian 地区に溯り、冬はアラス流域に下った。モンケは、一二五三年にフラグを西アジアに派遣するとの詔勅を発布してトルキスタンからアゼルバイジャンに至る牧地を遠征軍駐屯に備えて封禁し、バイジュの部隊をアナトリア東部に移動させた

(Juvaini / Qazvini, III, 94; Рашид/Ализаде, III, 20, 39)。しかしこの時シラムンはバイジュと行を共にせず、アナトリアではなくグルジスターンに移動していたことが知れる。一方『集史』「部族誌」には、フラグはバイジュがルーム征服の功を誇ったので罰し

その万人隊をモンケ＝ハンの勅書の権威によって、チョルマグンの子シラムンが治めた

とある。シラムンはグルジスターンにユルトを置いたまま、チョルマグン、バイジュに属していた探馬赤軍中の一万人隊を率いたのである。

『モンゴル人侵入史』には、アバガの弟モンケテムルのシリア遠征(一二七七年)軍中に「シラムンの息子 Ebagan」の名が見える(Brosset, I, 597)。この時には、エブゲン Ebügen (ペルシャ語史料の Abūkān) がシラムンの地位を継いでいたのであろう。エブゲンはアフマド・テグダル＝ハンの側近 (nazdikān, muqarrabān) の一人であって、アルグン＝ハン派部将のクーデター(一二八四年)の際には、アフマドの財産 (ughruq) の管理を命じられていた (Рашид/Ализаде, III, 180, 187)。『集史』「アルグン＝ハン紀」には、クーデター成功の

この後、チョルマグンの子シラムンの子エブゲンは裁かれ、アフマドの側近であったという理由で処刑された。(中略) (アルグン＝ハンは)グルジスターンを自分の叔父アジャイ Ajāy に与えた (Там же, 199-200)

とある。すなわちエブゲン刑死後のグルジスターン駐屯軍統制のためフラグの第八子アジャイが派遣されたのであるが、アルメニア人主教ステパノス Step'pannos の年代記七三四(一二八五年)の項には、

Ayjēn が死亡した (Hakobian, I, 48)

とある。アジャイがこの任にあったのは、約一年に過ぎない。また『モンゴル人侵入史』に、一二八九年、アルグンが

イメレチア Imereti に派遣した部将「シラムン＝ノヤンの子 Qontchiba」(Brosset, I, 607) の名が挙げられている。次に、『集史』「ガザン＝ハン紀」には、バイドゥを敗ってハンの位に即いたガザンは

チョルマグンの息子シラムンの息子バーイグート Bāyghūt をセゴンバド Seh Gunbad で処刑させた (Рашид/Алиэаде, III, 310 ; of. Vaṣṣāf, 139)

とある。一二九五年までは、シラムン＝ノヤンの諸子がグルジスターンに駐屯し続けており、父の軍隊の指揮権を保持していたものと思われるのである。(22)

第二節　ケレイト部千人隊

さて、『モンゴル人侵入史』には、先に述べたテグダル＝オグルが、イル＝ハン領内で破壊掠奪行動を続けていた時、彼の一分遣隊は、

千人の騎士を率いている Quormoutch なる者とその息子 Araliqan に属する種馬の群に行きあたった (Brosset, I, 582)

と記し、ディミトリ Dimitri 二世王統治年間(一二七三-八九月)の記事に (ibid., 602)

アルタンとサムツへの間のジャヴァヘティア Javakhet'i の山々に住んでいた Aliqan の息子

について記し、ダヴィティ六世王在位中(一二九二-一三一〇)の記事に

Aliqan の息子で、兄弟ブカをトゥカルに殺された Qourmouchi (Brosset, I, 614)

の名を挙げている。また Aliqan は、アフマド＝ハンの時代に要職にあったが、アルグンの身柄監視に当っていて、ク

ーデター側武将によって殺害された。(ibid., 601) すなわち、アリカン、クルムシ父子は、ペルシャ語史料の 'Alinaq ~ Alīnāq, Qūrmishī ~ Qurmishī ~ Qurmishī に他ならない。

彼等は、ケレイト部 Altāt 氏の人で、アリナクの父 Tūkūr 或いは Tūkūz は、ビチクチとしてフラグに仕え、バグダードの戦利品接収に当った百人長であった (Рашид/Ализаде, 1-i, 285)。『集史』「部族誌」には、彼は「メルキト部 Tudaqlin 氏の人 Quch.r の千人隊に属したが、

Qūch. r が死亡するとアリナクはまだ幼少であったが、フラグ＝ハンはクチュルの千人隊をアリナクに与えた (Тамже, 286)

とある。アフマドはアリナクに娘 Kūjūk を与えて好適し (Рашид/Ализаде, III, 167) たが、『ヴァッサーフ史』には、

グルジアの軍隊の長 (Muqqadam-i lashkar-i Gurji) で勇猛果敢な武士アリナクを使者に指名し (Vaṣṣāf, 118) てアルグンのもとに派遣した、とある。アリナクは、グルジスターン軍指令官の地位にあったのである。しかし、アリナクが、シラムンの万人隊を治めていたとする理由まではないであろう。

アリナクは一二八四年七月四日、アルグン＝ハン側武将のクーデターに際して殺害された。『集史』「部族誌」には、

'Alīnāq の諸子は Qūrmishī Kūrkān, Qūtūla, Būghāy-Arpah, Jāūdar であった (Рашид / Ализаде, 1-i,228)

とあって、クルミシが父の地位を継いだ。彼がグルカン(附馬)であったのも、父の妻クジュク＝ハトゥンを娶ったからであろう。クルミシの名は、一二八八、一二八九年の両戦役には見えないが、一二八九年にはシラムンの子コンチバと共にイメレチアに派遣されている。アルメニア人歴史家ステパノス・オルベリアンは、ゲイハトゥ＝ハンによって捕え

られ

我々の修道院タテフ Tat'ev に連行された大千人隊長クルムチ Khurhumch' (Патканов, 55)

について記すので、イル＝ハン交替の政変にかかわらず、千人隊長の地位を保持していたようである。アルグン＝ハンの死後、ハン選出に関してオルドの重臣タガチャル、クンチュクバル、トゥカル等が陰謀をこらし、諸部将もゲイハトゥ支持派とバイドゥ支持派に分れたが、クルムシは、スルドス部のチューパンと行を共にしてゲイハトゥ支持にまわっていた。右の事件はゲイハトゥの治世後期のことと思われる。

やがてバイドゥがゲイハトゥを殺してハン位につき、ガザンとの間に争いが生ずると、タガチャル、チューパン、クルミシ、ブグダイ＝イダチ Būghdāy idāji 等は秘かにガザンに臣従を誓い、ガザン軍が接近すると軍馬の調教を口実に持場を離れ、彼のもとに走った。『集史』「ガザン＝ハン紀」には

トゥダジュ Tūdāju の万人隊に属していたアミール＝チューパーンとアリナクの息子クルミシ＝グルカンは逃げ、(ガザン)のもとに至った (Рашид/Ализаде, III, 199)

とある。トゥダジュの父ドゥルバイ Durbay は、アバガの時代にディヤルバクルの将軍であり、トゥダジュ自身は、ゲイハトゥのヤルグチ、バイドゥのバグダード総督であった (Там же, 102, 242; Vaṣṣāf, 172)。これ以後クルミシは、ガザン西進、アルスラン＝オグル反乱軍鎮圧、グルジア王ダヴィティ六世反乱の鎮圧、ガザンおよびウルジャイトのシリア遠征に加わって功績を積んでいる。

しかし、七〇一年ズル・カアダ月(一三〇二年六-七月)ウージャーンで発布した勅令には、アミール＝ヌーリーンはアッラーンで冬営し (Рашид/Ализаде, III, 348)

アミール＝クトルグシャーは、軍隊を率いてグルジスターンに行くように

とある。ガザン即位以後、グルジア関係の国事にはクトルグシャーが当り、コーカサス山脈の奥地にまで出征しているから、早くより彼が、グルジスターン駐屯軍指揮官だったのであろう。

一方、クルミシ自身は、六九九（一二九九／一三〇〇）年のガザン＝ハン第一次シリア遠征の折のヒムス Ḥims の戦闘で二翼を率いている（Vaṣṣāf, 377）。明らかに彼が万人隊長の地位にあることを示している。また、ハーフィズ・アブルーはウルジェイト＝ハンの時代、七一二（一三一二／三）年のシリア遠征軍右翼の将軍六名中第五番目に彼の名を記す（Ḥāfiẓ-i Abrū, 104）。また七一六（一三一六／七）年にウルジェイトがチャガタイ家のヤサウル Yāsāūr＝オグル援助のためにホラーサーンに派遣した四万有余の軍の主将の一人はクルミシであった（Vaṣṣāf, 610-I; Qāshānī, 214; Hāfiẓ-i Abrū, 114; Saifi, 643）。この時代に万人隊長の位にあったものと思われる。

次に、アブーサイドがハンの位に即くと、『シャイフ＝ウヴァイス史』には、有力な部将が各地の守護に任じられたが（Ahrī, 150）

グルジスターンにはクルミシがいた

とある。クルミシはグルジスターン軍の総師の地位に就いていたことが知られる。

ところが、七一八（一三一八／九）年のウズベク＝ハン侵入の際、出陣命令を受けながら従わなかった部将には、戦後答刑が命じられたが、チューパーン＝ノヤンは、この刑を峻厳に実施した。『集史続編』には、処罰された高位の部将の内、

アミール＝アリナクの息子クルミシと、トグリルジェ Tughrilja の息子ガザンと、アミール＝ブカ＝イルドルジ

Īld. r. ji の三名は、今やアミール＝チューバーンは、我々を権力によって従えようと欲している。我々の父祖は決して彼の父の旗幟の下に進軍したことはなく、却って彼より地位が高かった（Ḥāfiẓ-i Abrū, 144）と謀り合い、チューパーン殺害の計画を練った。彼等はチューパーンの副官トグマク Tughmāq、前ディヤルバクル軍司令官イレンジン Īrinjin 等を味方に引き入れ、この計画を実行に移した。彼等の軍隊は、スルタニエに逃亡したチューパーンを追って前進したが、アブーサイドの支持を得ることができず、ザンジャーン Zanjān に近いミナーレ・ダル Mināra Dar でイル＝ハン軍に敗れた。捕虜となったクルミシは審問の後処刑され、彼の息子アブドルラフマンも父と同じ運命をたどった。（Ḥāfiẓ-i Abrū, 150、志茂一二〇-二頁参照）

クルミシと謀議をはかったブカ・イルドルジは、ホラサーン太守時代のウルジェイトに仕えており（Qāshānī, 234）、彼がハンの位に即いて後は、七一二（一三一二／三）年のシャーム遠征軍右翼部隊六人の部将の最後に名前が見える（Ḥāfiẓ-i Abrū, 104）。カラウナスのチューパーンの息子（ibid., 150）という以外に出身は知れないが、万人隊長級の武将であったろう。彼は捕虜となり処刑された。

主謀者の一人ガザンは、逃亡し、グルジスターンのアミール＝アルクナ・r. q. nāy の城塞に保護されたが追討軍に打たれた（Ḥāfiẓ-i Abrū, 160）。彼の父トグルルジェは、タングート人アジュ＝スクルチ Āju Sukurji の子で、一二八九年のダルバンドの戦役出征者中にその名が見え、一二九五年のアルスラン＝オグル Arslān Ūghūl の反乱鎮圧のためクルミシ、チューパーン等と共に出陣したが負傷して、クルミシの患護を受けた（Рашид / Ализаде, I-i, 329; III, 221, 305）。またガザン＝ハンの第二次シリア遠征に加わった「万人隊、千人隊の諸将」の中にトグルルジェの名が見え、「トグルルジェの千人隊」の語も見える（Vaṣṣāf, 374, 378）。彼は万人隊長でないにしろ、少くともかなり上位の

地位にある千人隊長であったようである（志茂、一二三-四頁参照）。

次にチューパンの副官であったトグマクについて、『ウルジェイト史』のウルジェイトの大アミールのリストに

(Qāshānī, 9)

二二番、側近（ināq）のアミール、トゥグマーク Tūq. māq。君側（muqarrabi-ḥaẓrat）にあるヒタイ人トカジャク T. kājāk の息子。

とあるが実は父は Kājāk ～ Kūnjāk であって（ibid., 28-29 ; 177）、チューパンの家臣ではなく、身分上はイル＝ハンに直属する高官である。

イレンジンは、ケレイト部のワン＝ハンの曽孫で、イル＝ハン家の婚族であり、ウルジェイトの宮廷では第六番目の高位を占めていた（Рашид / Ализаде, I-i, 272 ; Qāshānī, 9 志茂、一二七-八頁参照）。『ヴァッサーフ史』には、ウルジェイト死亡の時（一三一六年一二月）

大将軍イレンジンはグルジア人のもとに（dar Kurj）いた（Vaṣṣāf, 623）

とあって、彼のキシュラークもグルジスターンにあったことを示している。すなわち、グルジスターンにユルトを有していた有力な武将の四名までがクルミシと共に滅ぼされたのである。[23]

第三節　トカルとクンチュクバル

一二六二年の戦役、一二六九年のテグダル＝オグルの反乱鎮圧関係の記事にアバタイ Abātāy＝ノヤンの名が見える。彼はコンキラート氏人で、フラグに従ってイランに遠征し、『集史』「アバガ＝ハン紀」には、「古参の大将軍 umarā-i

buzurg-i qadīm」の一人に数えられている。息子達にナルブル Nārbūr、ヴトマン Vūtmān、クトルグ・テムル Qutlugh Tīmūr があり、ヴトマン、クトルグ・テムルは各々ブルガン＝ハトゥン Bulghān khātūn、キラムン＝ハトゥン Kīramūn khātūn をイル＝ハンの室に入れている（Рашид/Ализаде, 1-i, 398; III, 8, 196）。アバタイ自身は、六七九年サファル月（一二八〇年六月）に死亡したが（Там же, III, 153）、『集史』「アルグン＝ハン紀」にハンは

また、その時、アミール＝クンジュクバル Qunjuqbāl に恩籠を賜い、祖父アバタイ＝ノヤンの地位、すなわち中軍のアミールの職を与えた（Там же, 209）

とある。アルグン、ゲイハトゥ、バイドゥ三代の治世期にタガチャル Ṭaghāchār、トゥカル Tūkāl と共に国政を壟断した万人隊長クンジュクバルはアバタイ＝ノヤンの孫である。一族がイル＝ハンの外戚であるばかりか、彼自身アルグン＝ハンの長女ウルジタイ Ūljitāy を娶った（Там же, 197）。

彼のユルトは、『ヴァッサーフ史』に、ゲイハトゥがハン位に即くためルームからイランに来るという情報を得ると、バイドゥを擁立しようとしていた

クンジュクバルは逃げ、熟慮のためアラターグ Alātāq に行った（Vaṣṣāf, 257）

とあるので、ヤイラークは大アルメニアに、キシュラークは恐くアラス河の温暖な河岸にあったであろう。一二八八年、九年のジュチ＝ウルス軍侵入に先陣を命じられているのも、キシュラークがオルドと近かったことを示している。

クンチュクバルは、バイドゥと運命を共にし、ガザン＝ハンに処刑された。ウルジタイはジャライル部のアクブカ＝ノヤンに与えられた（Рашид/Ализаде, 111, 197, 300）。

トゥカルは、クンチュクバルと同じく、アルグン、ゲイハトゥ、バイドゥ三代にわたって宮廷で高い地位を得た武将

であった。『集史』「部族誌」の記載にはないが、「フラグ＝ハン紀」には、フラグの六女クトゥルカン Qūtlqān は、

ドゥルベン Dūrbān 氏のウルグドゥ Ūrghtu ノヤンの息子イスブカ Yisubūqā＝クルカンに与えられ、彼が死亡すると息子トゥカルが娶った

(Там же, 16)

とある。イスブカの没年は六六五（一二六六／七年）であるが（Там же, 16）、イル＝ハン国の年代記にトゥカルの活動が述べられるのもこれ以降である。またトゥカル自身は、アルグン＝ハンの次女ウルジャテムル Uljā Timūr を娶っている（Там же, 197, 306）。彼女は、トゥカルがガザンの命令で処刑されると、マングート部のクトルグシャー＝ノヤンと再婚した。

『ヴァッサーフ史』には、バイドゥが即位を望まないのを知って、彼を擁立しようとしていたトゥカルとクンチュクバルは、ゲイハトゥの報復を恐れ、『集史』「ガザン＝ハン紀」には、（Там же, 294）、

トゥカルはそれを不快として引返し、家のあったゴルジスターン地方に行った

とある。また『モンゴル人侵入史』には、ダヴィティ六世即位（一二九二年）間もなく

王ダヴィティのもとにアララットの山々に住むハン＝(sic.) トゥカルのもとに行くように誘う急使が来た(Brosset, 1, 613)

とあり、トゥカルがガザン側の武将クルミシに殺されると

王ダヴィティは、同じくオス人の諸侯バレジャン Baredjan に託されアテニ Ateni に置かれていた（トゥカルの）息子達、武器と財産の全部を引渡した（ibid., 616）

とある。トゥカルのヤイラークは、グルジスターン州の南部でグルジア領アルメニアのアララット地方の山地である。アテニにキシュラークがあったとは思われないが、ここはトビリスィ北西約六〇キロメートル、ゴリ地方の渓谷の村である。

アラクス河上流に、コンキラト、ドゥルベン両附馬家のユルトが存したが、彼等は、ガザン登祚の政変によって除かれたのである。

アラス河は、中流両岸にカラダグ Qarā Dāgh、カラバグ QarāBāgh、カパン Qāpān 等、上流にアララット、アラタグのヤイラーク適地を持ち、中流域にナクチェヴァン、下流にアッラーン、ムーガーンの温暖なキシュラークを有していた。今日もここにはシャフセヴァン、トルコマン等の遊牧民集団が見られる。ここには明らかに他にも多くの軍隊のユルトが設置されており、アバタイ＝ノヤン、ウルグトゥ＝ノヤンのみならず、チャガタイ家のテグダル＝オグル、ジュチ家の、トゥタル、バラガイ＝オグルのユルトも同河流域に設けられていた。

第四節　スルドゥス部の軍隊とチューパーン家のグルジスターン支配

ウルジェイト、アブーサイド両ハンの元帥 (amīr al-umarā') であったチューパーン＝ノヤンは、スルドゥス Sūldūs 部の人であった。『集史』「部族誌」に (Рашид/Ализаде, 1-i, 454-5)

スンジャク Sūnjāq＝ノヤンはフラグとともにイランに来て、ヤルグチ、右翼の千人隊長、宿営の武将 (amīr-i Kezik) を務めクケ＝イルカイ Kūkā Īlkāy の次席に座した。彼の兄弟にケフティ Kihtī＝ノヤン、アラテムル＝イダチ Arā Tīmūr Īdachi、トゥダウン Tudāun、テムル＝ブカ Tīmūr Būqā があった

とある。スンジャクの兄弟中トゥダウン＝バハドルは、一二七七年四月、アブルスターン Abulustān でスルタン＝バイバルスのマムルーク朝軍と戦って敗北した万人隊長であった。チューパーンはこのトゥダウンの子マリク Malik の子である。(Tam ke, 454)。彼は、クルミシと共にトゥダジュの万人隊に属し、バイドゥとゲイハトゥの支持者の間でハン位が争われた時にゲイハトゥに組し、ガザンが挙兵すると逸速くその幕下に参じ、バイドゥ軍との戦闘、アルスラン＝オグルの反乱鎮圧に功績があったことは既に述べたとうりである。

彼の地位はウルジェイトが即位すると著しく引き上げられ、ガザン＝ハン以来のアミールル＝ウマラーであったクトルグシャーに次いで第二の高位と「大将軍、タジーク人とトルコ人の総帥、正義王 (amīr-i buzurg, muqqaddam-i Tāzik va Turk, Khusrau-i ʻĀdil) の称号を与えられている (Qāshānī, 8)。また、一三〇七年のギラン親征軍の編成を見ると、チューパーンの率るスルドゥス部の部隊は、四個に編成された全部隊中の一つであった (Brosset, 1, 636-7)。

彼のユルトは、『集史続編』の既に述べたクルミシの反乱直前の記事に

アミール＝チューパーンはグルジスターン方面に向った。兵士は各自の目的地に向った。アミール＝チューパーンは長子アミール＝ハサンを荷物 (ughrūq) と妻のもとに留め、自分は若干の騎士を連れてコクチェ・デンギス Kūkja Tingīz に向った (Ḥāfiẓ-Abrū, 144)

とあり、後にチューパーンの孫マリク・アシュラフに会うためにルームよりナヒチェヴァン経由でカラバグに向った人々は、

アミール＝チューパーンのヤイラークであったガスレ・ターグ Qaṣr-i Tāq とゴクチェ・デンギズに (Ḥāfiẓ-i

abrū, 222; cf., Samarqandi, 192)

到着したと記す。チューパーンのヤイラークはゴクチェ・デンギズ(デニズ)すなわちセヴン湖の岸に存したのである。またオグルークを置いていたキシュラークは、オルドに近いクル河岸だったろう。

クルミシの反乱後、グルジスターン軍の総帥の地位については、『シャイフ＝ウヴァイス史』に

シャイフ＝マフムードをグルジスターンに派遣した (Ahrī, 151)

或いは、

シャイフ＝マフムードはグルジスターンを降した (ibid., 152)

とあり、『集史続編』に

アミール＝チューパーンの息子達の中にアルメニア Arman とグルジスターンの支配権を与えられていたシャイフ＝マフムードがいた (Ḥāfiẓ-i Abrū, 183; cf., Samarqandi, 70, 83)

とあって、チューパーンの第四子シャイフ＝マフムードに与えられたのである。

チューパーンが一三二七年に失脚すると、シャイフ＝マフムードも捕えられ、処刑された (Ahrī, 155; Ḥāfiẓ-i Abrū, 139; Samarqandi, 13) が、

グルジスターンはクトルグ＝シャーの息子イクバール＝シャーに与えられた (Ahrī, 155)

とあって、シャイフ＝マフムードの地位は、ガザンのグルジア軍指揮官で、ガザンとウルジェイトのアミールル・ウマラーであったクトルグシャーの息子イクバルシャーに与えられた。

ところが、同じく『シャイフ＝ウヴァイス史』に、七三四(一三三三／四)年冬、アブーサイド＝ハンがバグダードで

冬営中

アミール＝シャイフ＝ハサンはグルジスターン方面に行くようにとの勅令が下り、アミールはその方面に赴いた (ibid., 157)

とある。ジャライル部のハサン(大ハサン)がグルジスターン軍の指揮を命じられたのである。しかし、彼は間もなくルーム総督に転じ (ibid., 157)、グルジスターンでは、チューパーン家の人々の勢力が強大となる。

チューパーンが、ウルジェイトゥ＝ハンの娘サティ＝ベグ Sāti Bīk との間になしたスルカン(・シラ) Sorqan(Shira) は、大ハサンがグルジスターンに派遣された時に母と共にアッラーンのカラバグにいた (Samarqandi, 127; 149)。アブーサイドが死亡すると(一三三五月)、彼はウクランジ Ūkranj ウルトゥクシャー Urtūq Shāh、ラシードウッディーンの子ギャースッディーン・ムハンマド等と企ってアルパ＝ケウンをハン位につけた。しかし、七三六(一三三五／六)年ムーサー Mūsā を支持するオイラート部のアリー・パードシャーの軍にアルパが敗れるとスルカンはグルジスターンに逃げた (Ḥāfiẓ-i Abrū, 149-150)。ジャライル朝の大ハサンは、アリー・パードシャーに抗すべくムハンマドを擁して挙兵すると(一三三六年)、彼は大ハサンに組し、勝利の後カラバグの入口からグルジスターンの入口までを与えられた (Ahri, 164)。

一三三八年チューパーン家のハサン(小ハサン)が大ハサンをバグダードに追った時もタブリーズに留まり、実母サティ・ベグが即位すると、小ハサン、アリー・ウクランジ、ウルドゥブカと共にアミール職を与えられた (ibid., 166)。この間もスルカンのユルトはグルジスターンにあったが、七四一(一三四〇／一)年にはイラク・アジャミーを与えられて、ライに去った (Ahri, 168; Samarqandi, 156)。

かつてのグルジスターン総督シャイフ＝マフムードの子ピール・フサインは、大ハサンの武将であったが、大ハサンと小ハサンとの間に戦闘が生じた時には後者に味方した（Ahrī, 166: Ḥāfiẓ-i Abrū）。『集史続編』には、この後スレイマーンをハンに擁立した小ハサンは、

イラク・アジャミー、アーザルバーイジャーン、アッラーン、ムーガーンと自分の従兄弟でシャイフ・マフムードの子ピール・フサインと兄弟達が持っていたルームに至るまでのグルジスターンを把握し、所領とした（dar qubsa-i tassaruf va iqtadār dar avard）。アミール＝ピール・フサインは、能う限りの多勢の者とともにカルス Qārṣ 地方に向った（Ḥāfiẓ-i Abrū, 208）

とある。この時までシャイフ＝マフムードの子のピール・フサインがグルジスターンにいたが、小ハサンにここを開けわたしカルスに移動したのである。彼の兄弟達とは、シールーン Shīrūn、チャマガーン Ch. m. ghān、ドアハーン Dū ākhān であろう（ibid., 183）。ピール・フサインはこの後ファールス総督を命じられたが、在任中小ハサンによって毒殺された（ibid., 183, 208, 214, 219）。

小ハサンが暗殺された（一三四三年）後、息子のマリク・アシュラフが北西イランの支配権を得たが、『集史続編』には七四八（一三四七／八）年、アーザルバーイジャーンのカラバーグに大アミールで、大軍を擁してグルジスターンに居たアミール・ジダーイ J. day が全馬群と共にマリク・アシュラフのもとに来た（ibid., 227）

とある。マリク・アシュラフは、カラバグの冬営地からダブリーズに向う途中、本営に伺候した高位の武将でグルジスターンを支配していたジダイを、この後謀殺し、彼の従者を掠奪させた。ジダイについては、七四四（一三四三／四）年にスルカンがマリク・アシュラフと争った時後者に組し、スルカンの戦列を破る功を上げている（ibid., ）他に知ると

ころはない。考え得ることは、彼がマリク・アシュラフの譜代の臣ではなく、同盟者であって、マリフ・アシュラフの統治権内の異質な要素であったので、マリク＝アシュラフは将来彼が自己の権力の敵対者となり得ると考えて除いたのであろう。イル＝ハン国中後期に、グルジスターン軍の司令官であったシラムン＝ノヤンの子孫、アリナク、クルミシ＝グルカン父子等は政変叛乱の際に処刑され、オルドの重臣であったトゥカル、クンチュクバルも失脚した。チューパーン朝の時代には、ソルカン＝シラ、ピール・フサインの子シャイフ＝マフムード、アミール＝ジダイがこの地方にいたが、彼らも次々と移駐、謀殺を被ったのである。

第三章　シルヴァーン＝シャー国、グルジア王国の自立

歴代イル＝ハンがシルヴァーンとグルジスターンに配備した軍隊は、次第に配置転換、領袖の没落等部族編成改変の理由となるような事情に至ったことは既に述べた。

『集史続編』には、グルジスターンのセヴァン湖に近い一城塞に籠城していたアミール＝ガザンの反乱が鎮圧された七二〇（一三二〇／一）年冬

そのころ軍隊から、「その方面に定められていた諸城の守備隊と前衛が減少し、ここは辺境であるので彼等はこの為常に危険にさらされている。兵員に不足が生じ、軍人が（定数より）少いのは望ましくない」。という報告があった。スルターン＝アブーサイドは彼等の言を取り上げ、全軍がその方面に行き、またスルターンの命令によってその州の知事（hākim）である大副官（muṣāḥib-i buzurg）となるように決定した（Ḥāfiẓ-i Abrū, 160）

とある。また、アブドルラザク・サマルカンディー 'Abd al-Razzāq Samarqandi の年代記七二二(一三二二/二)年の項には同じことが、

スルターンは、その方面の軍隊な充分であるように、スルタン＝ウルジェイトゥの命令によってそこにあった知事(hākim)は、その地方の司令官(farmān-farmā)であるように、また諸地方の情報を集めるように、と命じた(Samarqandi, 53)

とある。辺境軍の減少が報告されたので、兵員の再配備、新たな任命によらないで各地方軍の司令官はそのまま留任すること、情報集収に意を用る等のことが命令されたのである。

ところで、マフムード＝ハンを擁立して、北西イランの支配権を得たジャライル朝のシャイフ・ハサンは、一三三八年麾下の部将にユルトを分配したが、『シャイフ＝ウヴァイス史』には次のようにある。

シャルール Sharūr とドヴィン Dvīn をナフチヴァーンに至るまでアクジー Akji の息子ハサン＝ベクに、カラバグの入口からグルジスターンの入口までをアミール＝スルカンに、シルヴァーンと前線をイキンジ Iqinj の息子シャイフ＝チューパーンに、ムーガーンとバールーン Bārūn の千人隊を自分の息子ユースフ・シャーに与えた。(Ahri, 164)

シルヴァーンにシャイフ＝チューパンがグルジスターン東部にはスルカンが派遣されたのである。グルジスターンには先に述べたピール・マフムードの諸子、及びアミール＝ジダイがいたはずであるが言及されていない。ところがチューパン朝のマリク・アシュラフの支配権が確立して、彼がタブリーズに入城し新王朝の基礎が置かれた七四八(一三三七/八)年、アブドルラザク・サマルカンディーは(Samarqandi, 224)

アーザルバーイジャーンとイラク・アジャムとアッラーンとムーガーンとグルジスターンの一部とクルディスターンとトルクマーンの諸部を武将に分け与え、必要な国事を定めた

と記す。シルヴァーンには言及されておらず、グルジスターンも一部のみが分配されているだけである。また、『シャイフ＝ウヴァイス史』には、同年バグダード遠征に失敗したマリク・アシュラフは（Ahri, 173-4）

再びタブリーズに入城した。彼は百頭の飢えた狼をアーザルバーイジャーンとアッラーンに放した。彼等は各人が望むところのことを行い、住民は命からがら国を捨てた。あるものはギーラーン、シルヴァーン、キプチャーク草原に行き、いくらかの者はグルジスターンに行った

とある。すなわに、シルヴァーンとグルジスターンはマリク＝アシュラフの放った百頭の狼すなわち徴税吏から自由であったのである。（cf.,Ализаде, 377; Nabai, 279-316）

また、マリク・アシュラフの領土を占領したジュチ＝ウルスのジャニ＝ベクの子でイラン総督に任命されていたベルディ＝ベクが本国に撤退（一三三五年）すると、マリク・アシュラフの子アヒジューク Akhijūq が父の旧臣を糾合して、支配権を樹立したが、『シャイフ＝ウヴァイス史』には（Ahri, 180）

彼はアーザルバーイジャーンをアシュラフ朝の武将達に分割し、各人に一地方を与えた。アミール＝シャー・ラーフダール Rāhdār をコクヂャク Kukjak、ピール＝フサインと共にアッラーンに遣した

とある。アーザルバーイジャーンとアッラーン以外については言及されておらず、シルヴァーンとグルジスターンにはアヒジュークの支配権は及ばなかったもののようである。

シルヴァーン、グルジスターン両地方からモンゴル軍が移動したことによって、モンゴル人政権と土着地方政権との

関係はどのように変化したであろうか。これらのモンゴル軍はジュチ＝ウルス軍の侵入に対する防衛軍としての役割を果したと同時に、占領軍として、駐屯する地域に混乱が生ずればただちに出動して鎮圧掃討を行う機能を有したからである。

大コーカサス山脈がカスピ海に没するシルヴァーン地方は一二世紀よりキスラーニー Kisrānī 朝のシルヴァーン＝シャーの支配下にあった。フラグ＝ハンがイランに到着した時、当時のシルヴァーン＝シャーがオルドに伺候したことは知られるが、その後一三三〇年代に至るまでのシルヴァーンの動静を示す史料はきわめて僅少で、かろうじて君主シルヴァン・シャーの系図がたどれるに過ぎない。ペルシャ語年代記に再びシルヴァーン＝シャーの行動が見えるようになるのは、チューパーン朝の時代になってからである。

その最初は、七四五（一三四四／五）年ケイコバード Kaiqubād の息子で、父に代って実質上君主の地位を与えられていたカーウス Kāūs がカラバーグのマリク・アシュラフのオルドに伺候した記事である。

カーウスは、マリク・アシュラフが臣下の一武将を処刑するのを目撃して恐れ、本国に逃げ帰ったのであるが、これは、七四七（一三五六／七）年、七四八（一三四七／八）年の二度にわたるチューパーン朝のシルヴァーン遠征の原因となった。アブドルラザク・サマルカンディーは、最初の遠征について

カーウスが河岸に来たので、アシュラフには、事が成立なかった。彼等は互に和を結んで、離れた（Samarqandi, 223）

と記して、シルヴァーン＝シャー軍は、アシュラフ軍のクル河渡河を阻止したことを述べる。二回目の遠征軍はクル河は越えたものの、カーウスを捕えることも殺すこともできず、各地を荒掠したに過ぎなかった（Ḥāfiẓ-i Abrū, 227;

Samarqandī, 224; cf., Ализаде, 376-7; Nabaī, 295-8)。

マリク・アシュラフはシルヴァーンに駐屯軍を持たなかったから、遠征軍の武力のみによってはシルヴァーン・シャーを支配することは既に困難になっていたのである。七四五年カーウス来朝の折、マリク・アシュラフが、彼に

全き栄誉を与え、金糸の帯、帽子、金飾りの剣を下賜し、毎日彼に接見の名誉を授けた（Ḥāfiẓ-i Abrū, 225)

のはこの理由によるものであろう

次に、マリク・アシュラフの子アヒージュークが父の残党を集めて支配権を打ち立て、アッラーンを自己の武将に与えた時、ガンジャ Ganja の住民はカーウスに救援を求めた。カーウスは息子ヌールダル Nūrdar を派遣した。シルヴァーン軍がクル河のジューイ・ノウでチューパーン朝の軍隊を敗り、アラス河まで進撃した後、両者の間で和平が結ばれ、カーウスはシルヴァーン、アヒージュークはカラバグに戻った（Ahrī, 180)。すなわちこの時、シルヴァーン＝シャーは、チューパーン朝の権力から完全に独立していたのである。

また彼は、ジャライル朝シャイフ＝ウヴァイスの時代に二度にわたってカラバグに遠征し、多くの住民を捕虜としてシルヴァーンに連れ帰った。[24] これは、シャイフ＝ウヴァイスの懲罰遠征を惹起した（七六八＝一三六六／七年)。しかし、遠征には成功したものの、ウヴァイスは、カーウスに七六五（一三六三／四)年以来の臣従関係の再確認を求めたにすぎなかった（Ализаде, 378-9)。

一方、グルジスターンは、アッラーンの側面に位置してカフカース山中のダリヤル峠を押え、シルヴァーンと共にイル＝ハン国本土防衛の牆壁であった。王都トビリスィにはモンゴル人の総督（シャフネ＝ダルガチ)が置かれて治安維持に、イラン人徴税官（vālī) が税務に当った。また、本稿に述べたごとく多数のモンゴル人がこの地方の内部にユルト

を割当てられていたが、彼等は占領軍であって、一旦反乱が起これば、最初に動員された。従って、イル＝ハンの権力が弱まり、クル河流域のモンゴル軍兵力に減退を見始めたアブーサイドの治世期以降、グルジア王国の政治的活力は飛躍的に高まった。『モンゴル人侵入史』には次のように記されている。

(一)イランのモンゴル人の間に分裂が生じたので、ギオルギ Giorgi 光輝王(在位一三一四?～一三四六年)は、グルジアからタタール人を追放した。或る者は策略によって、また或る者は武力で、総て彼の領土から姿を消した。(中略)彼は軍隊を集めるとラン(アッラーン)に入った。そこでは何の抵抗にも逢わなかった。そこからシルヴァンに行き、勝ってティフリス(トビリスィ)に帰った(Brosset, I, 646-7)。

(二)彼の支配権は次第にモウカン(ムガン)、ラン、ソムヘト Somkhéth(アルメニア)に固まった。それらは彼に定期的に貢納を納めた。彼の領土内にタタール人は残っていなかった。全グルジアは秩序が整えられて法の下に臣服し、ニコプスィアからデルベンドに至るまでのコーカサスの住民、ラン、モウアカン、シルヴァン＝シャフは彼の属臣であった(ibid., 648)。

モンゴル軍がグルジスターンから押し出され、グルジア王は、最盛期タマラ女王の治下と同じく、シルヴァーン、アッラーン、ムーガーン、アルメニアに宗主権を及ぼすようになったと記されている。グルジア語年代記の記事がどこまで正確であるかは、他の史料との対比を必要とするが、アブーサイドの晩年より混乱と分裂に陥ったイランのモンゴル人は、クル河左岸を制圧することができず、少くとも王の晩年、すなわちチューパーン朝の時代、グルジスターンには、モンゴル人の支配権が及んでいなかったことは既に述べた。

ジャラーイル朝は、グルジア王に対する宗主権を保持することができたが、シルヴァーン＝シャーに対するのと同

様、それはほとんど名目的なものであった。(cf., Lang)

アブーサイドの末年にシルヴァーン、グルジスターンのモンゴル軍は、兵員の不足をきたしていたが、イル＝ハン国が崩壊して、有力武将が傀儡のハンを次々と擁立する時代になると両地方のモンゴル軍部隊は各地に転戦を余儀なくされ、あるいは内訌によって解体された。こうしてモンゴル人がクル河の北から去った後、シルヴァーンとグルジスターンは自治あるいは独立を取りもどすことができた。チューパーン朝、ジャライル朝は、クル河以北には駐屯軍を置くことができず、一時的に遠征軍を派遣する以上のことは不可能であったので、両国に宗主権を認めさせるのみに甘んじなければならなかった。

結　語

本稿はイル＝ハン国のモンゴル人部族遊牧地分布解明の観点から、北辺防備のためにクル河、アラス河流域に配置されていたモンゴル軍に着目し、クル河支流アク・スーに沿って設けられた要塞スィバとその駐屯軍について、またダルバンドの前線を防備するためシルヴァーン地方に駐屯する軍隊、グルジスターンのクル河、アラス河流域に置かれていた軍隊の遊牧地と領袖の出身、経歴について知るところを述べたものである。

イル＝ハン国の対ジュチ・ウルス防衛の中心であったスィバは、最初にフラグが設けた陣地で、アバカは一二六五年、これを恒久化するとともにアク・スー下流のダラン・ナウルから上流のガルドマンまで延長した。当初はここにグルジア兵、ムスリム兵とともにモンゴル兵が冬期間駐屯していたが、アブー・サイドの末年には、この方面における人員の

不足が深刻な問題となり、イル・ハンに取ってかわったチューパーン朝のマリク・アシュラフの時には、スィバもその背後のクル河岸も全く無防備のまま放置されていたので、ジュチ・ウルスのジャニ・ベク＝ハンは住民の支持もあって容易に北西イランを占領できた。

シルヴァーン地方とムガーン地方には、フラグの晩年ヤシュムト・オグルが派遣され前線地域の防備に当った。ガザン＝ハン期にはシルヴァーンとグシュタスフィーに多くのモンゴル軍イクターが設けられ、ヌーリン＝アカ、その死後はクトルグ・シャーがアッラーンに駐屯してダルバンド方面防備の最高司令官をつとめた。アブー・サイドの時代には、北にザンギー、南にタルムターズ二人の万人隊長が派遣されていた。前衛万人隊と呼ばれていたシルヴァーン駐屯軍は、一三一九年にはイキンジ、一三三六年までにはその子シャイフ・チューパーンに与えられたが、シャイフ・チューパーンは、一三四三／四年アーゼルバーイジャーンに移動し、シルヴァーンの防備は放棄された。

スィバの西南グルジスターンのモンゴル軍は、前線に近いクル河水系域に駐屯するものと、首都に近いアラス河水系域にユルトを有したものとに二分される。グルジスターン地方軍とみなせるのは前者である。グルジスターン軍司令官の地位は、シラムン、アリナク、クトルグシャー、クルミシ、シャイフ・マフムード、イクバル・シャー、大ハサン等が次々とうけ継ぎ、特定の家柄が独占することはなかった。チューパーン朝が成立すると同家のスルカン、ピール・フサイン、同家外のアミール・ジダイ時がこの地位にあったがマリク・アシュラフのために除かれた。こうしてグルジスターンにはマリク・アシュラフに対抗し得る強力なモンゴル軍は存在しなくなった。

またアラス河水系域には、コンギラト氏、ドルベン氏、旧ケレイト王家の三附馬家があったが、いずれも解体された。モンゴル軍移動の後、シルヴァーンとグルジスターンの土着政権は独立の途を歩きだした。シルヴァーンではシャマ

ハとシャーバラーンの領主 hākim (malik) であったカーウスが伝統あるシルヴァーン・シャーの王号を称し、グルジスターンではグルジア王ギオルギ光輝王が西グルジア、クタイスィ Kt'aisi 地方の王国と西南グルジアのサムツヘのアタベク領を統合した。両国はイル＝ハン国の後継者国家であるチューバーン朝、ジャライール朝に対してある時は宗主権を認めて従属し、ある時には公然と敵対さえした。

これは、イル＝ハン国崩壊後のシルヴァーン・シャー国、グルジア王国が、ヘラートのクルト朝、南イランのムザッファル朝のようにモンゴル・トルコ系の遊牧部族をも政治的、軍事的に掌握して成立した政権ではなかったことを示している。

イル＝ハン国のモンゴル系、トルコ系の軍隊と彼らの家族は長く遊牧生活を捨てず、イル＝ハンによって指定された夏冬の遊牧地の間を移動した。彼らは職能的戦士集団ではなく、家族と家畜をともない、再生産の体系を有していた。牧地をめぐっての定着農民および先住遊牧民との関係、また穀物と手工業製品供給のための農村および都市との交流は、社会経済史、社会史上の興味あるテーマであるとしても、本稿で用いた史料と方法では、知ることができない。特にヒューマン・エコロジーの面からの実態は同時代史料からは分析できず、後世の実地調査にもとづいた研究から類推するに留まろう。(25)

モンゴル人は単に軍人と言うだけでなく、イル＝ハン国の一等市民であったから、彼らの領袖はイル＝ハン一族と通婚し、一種の貴族階級を形成し、様々な官制の要路を占めた。従って千人隊、万人隊の指揮権と部族支配権の継承をイル＝ハン国全土について明らかにすれば、イル＝ハン国政治史の多くの側面が現れてくるであろうし、それ以降のイラン政治史の展望も開かれるであろう。本稿に述べた地域に関しても、建国以来の集団が次第に解体あるいは移動して、最

終的にはチューパーン朝、ジャライール朝に対抗し得る勢力が残らなかった事情を示すことができたのである。

しかし、それに先だって千人隊、万人隊そのものの制度的研究が必要であると思われる。この人事、組織がどのようであったかの具体的全体像を示さないで、特定の個人の昇進、降格等の記事を追っても、国家組織に関する知識は得られないであろう。[26] 本稿で仮にシルヴァーン軍、グルジスターン軍と呼んだものの姿が明瞭でないのもそのためである。[27]

ここに記した軍隊は、北西イランに駐屯していたものの極一部にすぎない。一例をあげれば、ウルジェイト＝ハンの宮廷の二五名の大将軍（umarā'-i buzurg-i chāg-i Ūjājaitū）中、ホラーサーンの四名、ルーム、ディヤルバクル、バグダードの計五名を除いた一六名中の四名（チューパーン、イレンジン、タルムターズ、トゥクマク）について言及したのみである。イル＝ハン国の全土について、また軍隊組織の全体について同様の検当を行い、イル＝ハン国の国家構造と土着社会支配体制を俯瞰することは今後の努力に期したい。

註

(1) グルジスターンは、グルジア（Рус. Грузия）、ジョージア（Eng. Georgia）、自称（Sakartvelo）のペルシャ語の表現である。イル＝ハン国のグルジスターン州は、セルジューク朝以前とは異って、グルジア・バグラト朝の領土から成っており、大アルメニア州の一部も含んでいる。また、イスラーム地理学の習慣では、西部グルジアをグルジアの他の地域と区別してアブハーズ（Arab, Per., Abkhāz）と称する（Mustaufi, *Nozhat*, 108）。また、シルヴァーンは今日のソ連邦アゼルバイジャン共和国の北半、クル河以北の地の歴史的呼称であるが、ダルバンドとグシュタスフィーが別個の地方として数えられる場合もある。

(2) フラグの時代にホージャ・アズィーズ（Khwāja 'Azīz）がトビリスィ（ティフリース）の徴税官（valī）であったことがあり（Brosset, 556, 563; Рашид/Ализаде,III, 88）、また、ジャライル部人ブグン Būghūn がグルジスターンのシャフネ shahna であることがあった（Рашид/Ализаде, 1-i, 135-6）。イル＝ハン国は両職によって支配地の行政的掌

握を行った。

(3) 本田實信「ガザン＝ハンの税制改革」『北海道大学文学部紀要』第一〇号、一九六一年、同「イルカン国におけるイクター制について」『北海道大学文学部紀要』第七号、一九五九年

(4) ルストレインジは、(Le Strange, 177) シルヴァーンに隣接するアッラーン地方のトルコ化は、モンゴル人の侵入期に始り、チムール朝に完成したとする。

(5) 本田實信「イルハンの冬営地・夏営地」『東洋史研究』第三四巻第四号、八一一〇八頁。

(6) V. Minorsky, "Mongol Place-names in Mukri Kurdistan," *Belletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. XIX, no. 1, 1957; Enteshārāt-e Dāyerā-e Joghrā fiyāyi-ye Setād-e Ardesh, *Farhange joghrāfiāyāyi-e Iran*, I-X, Tehran, 1949-1954

(6) シルヴァーン、グルジスターン関係の戦乱の記事に名前が見える武将は次のとおりである。

①一一六一-三年の対ベルケ戦、Shirāmūn(前衛),Samāghār (同上)、Abātāy (同上), Īlkāy, Tūdān, Bātū, Saiīdāy, Chaghān, Bulārghū, Dūghūn, Sulṭān Jūq (Рашид / Ализаде, 111, 87-8; Mustaufī, T. G. 509; Banākātī, 424-5)

②一一六五年の対ベルケ戦、Yashmūt Ughūl, Qūtū-Buqā, Taghachar (Рашид/Ализаде, 111, 103-4)

③一一六九年のテグダルニオグルの乱、Shīrāmūn (Sirmon), Alīnāq (Aliqan), Qurmīshī (Qour-moutchi), Abātāy (Там же, 112; Brosset, 577, 578; Mustaufī, T. G., 591

④一一七一年？ のイメレチア遠征、Sirmon, Aliqan, Taicho, Abatchi (Brosset, 585)

一一七三年？ のイメレチン遠征、Sirmon, Alican (ibid., 585)

⑥一一八八年の対トゥンラカ戦、Būqā Jīnksān, Qunjuqbāl (前略) Рашид/Ализаде,, 111, 208

⑦一一八九年の対トゥンラカ戦、Tūkāl (前衛), Shīktūr b. Īlkāy, Qunjūqbāl (前衛), Tagajār, Ṭughrīlja, Tāijū b. Būqū, Chūbān (там же, 221; Mustaufī, T. G. 598)

⑧一一八九年イメレチアに出兵、Quntchiba fis de Sirmon Noïn, Qourmtchi fis de Aliqan (Brosset, 607)

⑨一一九六年のアルスラン＝オグルの乱、Chūbān, Sūlāmīsh, Qūrmishī, Ṭughrīlja, Tāytāq, Ilbāsmīsh (Рашид/Ализаде, III, 305; Mustaufi, T. G., 603)

⑩一一九五年のグルジア王ダヴィドの反乱、Khoutlou Chah, Siboutchi filis de Khoutlou Chah, Qourmtchi, Arpha frère de Qourmtchi, Alinji (Brosset, 619, 621, 625)

⑪一三一八年ダルジア王ギオルギの即位援助、Zaal-Mélik, Akhrountchi frère du père de Tchopan (ibid., 642)

(7) V. Minorsky, *A History of Sharvan and Darvand in the 10th-11th century*, Cambridge, 1958; C. O. Ханмагомедов, *Дербенд* (*Горная стена Аулы Табасарана*), Ленинград, 1979

(8) Рашид/Ализаде, 111, 87-89; Vaṣṣāf, 49-50; Mustaufī, *Ta'rīkh-i Guzidā*, 590; Bānākatī' 424-5; Dulaurier,505-6; d'Ohsson, III, 379-383 佐口訳第五巻三七一—一二頁; Howorth, Part II, div., 1, 113-116, part 111, 193-199 Boyle, *Dynastic*..., 352-354; Ализаде, 318-320

(9) Рашид/Ализаде, 111, 103-104; Vaṣṣāf, 51; Mustaufī, *Ta'rīkh-i Guzīda*, 591; Banākatī, 427-428; Dulaurier, 1858, Juin, 508, 1860, Oct.-Nov., 310-311; d'Ohsson, 111, 418-419; Howorth, part 1, div., 1, 123-124, part 111, 223-224; Boyle, 354; Ализаде, 320-321

(10) ヴァッサーフの年代記に付されている『ヴァッサーフ語彙集』には「sībā 及び sībah はトルコ語で城壁 dīvār-i bast を言う」とある (Vaṣṣāf, 681; cf, Ализаде, 321)。モンゴル軍はバグダード包囲戦で sibē を設けた (Boyle: 348)。ブロッシェは siba は "un retranchement" を意味するアラブ語であるとする (Brosset, 569-570 n)。しかしこの語は元来『砦』を意味するモンゴル語である (D. Lessing, *Mongol-English Dic.*, Berkeley and Los Angeles, 1960, p. 694)。また陸軍省編蒙古語大辞典、蒙和の部、中、九九九頁には、"Sibege, sibegen" に①生籠②柵柵③城壘の訳を与えている。

(11) ダルジア語文献に見えるサコ Sako について、cf., K. P. Кикнадзе, К разъяснению однаго географического названия в сочинении грузинского анонимного историка XIУ века (на груз. яз.), *Грузинское Источниковедение* 1, 1973

(12) 中世フランス語テキストには、"fousées e autres tranchés" ラテン語テキストには "magna fossata et alia munimenta (p. 336) とある。

(13) ガルドマンは『集史』には、"dasht-i K. r. d. mān" とあり、『シャイフ・ウヴァイス史』には、"ṣahrā-i K. r. d. mūn" となっている。地図で見る限り、アク・スー流域は、アク・スー市附近より山地となっている (*World Aeronautical and Operational Navigation Chart*, Produced by SPS, RE in 1967 from PC F-4c Base 100, 1965, Baku) ので、平野という表現が妥当であるかには疑問が生じよう。なお、Gerdman, Gardman という地名はコーカサスの各地に見られる (V. Minorsky-, *Studies in Caucasian History*.

London, 1953, 29-30, 66; P. Hovhannēsean, *Haiastani Berderē*, Venetik, 1970, 478-480; H. Hübschmann, *Die Altarmenischen Orstnamen*, Amsterdam, 1969, 352; Л. А. Чиланшвили, *Город в Феодальной Грузии*, 1968, стр. 51) この地域で野外踏査を行ったアゼルバイジャン科学アカデミー歴史学研究所々員は、このあたりには多くの遺跡があり、発掘しなければ特定は根難であると述べた。

(14) この語は中世アルメニア語には見られない。モンゴル・トルコ語の /s/,/sh/ は、アルメニア語に入る際相互に交替するこがあり（例 M. Shiremün 人名〉Arm. Sirmon)、またアルメニア語字母 he（無音の y）と ray（軽い r）は形がよく似ている。また、デュロリエ訳の転写は西部方言によっているから、東部方言では shibar と表記される。すなわち "siba" である可能性がある。

(15) サマグル＝ノヤンは一二七七年春にトゥグ、トゥダウンの両武将がアブルスターンで戦死した後、ルームに派遣された Рашид/Ализаде, III, 102; cf., Faruk Sümer, "Anadolu-da Moğollar", *Selçuklu Arastirmalari Dergisi*, I, 1969, p. 56è 61-62) メングテムルも一二八二年にモースルで死亡した（Рашид/Ализаде, III, 164)

(16) ハラートの君主シャムスッディーン・クルトは、六七五（一二七六／七）年オルドにおり、彼の息子ロクヌッディーシはダルバンド防衛軍に編入されていた（*The Ta'rīkh Nāma-i Harāt of Saif ibn Muhammad ibn Ya'qūb al-Hārawī*, ed., Muhammad Zubayr aṣ-Ṣiddīqī, rep. Tehran, 353-4)

(17) アルターンはアラーン Alān と読むべきであろうか。

(18) ヴァッサーフも、ガザンは第一次シリア遠征（一二九九―一三〇〇年）に先だって、キシュラークの地バグダードで、ヌーリーンにダルバンド、バクー、アッラーンの守護を命じた、と記す（Vassāf, 373)。

(19) ヌーリン、クトルグ・シャー両者の出自経歴については、志茂論文、一一三―六頁、八三―五頁を参照せよ。

(20) 『集史続篇』にも「これに先だって、スルターン・アブーサイドの側からバルミヤーズ Barmiyāz が数部隊の兵士と共にその方面に派遣されていた」とある（Hāfiẓ-i Abrū, 134)。Barmiyāz は Tarmtāz が正しい。彼の出自については、cf., F. Sümer, loc. cit.

(21) *Советский союз, Азербайджан*, Москва, 1971, 34-35; *Советский союз, Грузия*, Москва, 1967, 34-35; *Советский союз, Армения*, 1966, 36-37;

(22) チョルマグン＝ノヤン系の軍隊についても、志茂碩敏氏が論文を発表されるはずである。

(23) ヌワイリーは、タズ Taz がクルミシの有していたタバリ

スターンの指揮権を継いだ（d'Ohsson, IV, 542, n 佐口訳第六巻二九六頁）とするが、タバリスターンは、明らかにグ（ク）ルジスターンの誤りである。

(24) カーウスはカラバグに侵入して多数の捕虜をもたらしたが、これはかつてセルジューク朝の支配から脱したグルジア王国がクル河中、下流に多数のキプチャク人を入植させたと同じく、シルヴァーン各地の荒撫地に植民させるためであったろうと思われる。モンゴル遊牧民の移住、ジュチ＝ウルス軍の侵入によって、シルヴァーンの農村は荒廃し人口も減少していたと推定できるからである。（I. P. Petrushefsky, "The Socio-Economic Condition of Iran under the Īl-Khāns," *The Cambridge History of Iran*, vol. 5, Cambridge, 1968, p. 499; Ализаде, стр. 254）

(25) R. Tapper, *Pasture and Politics-Economics, Conflict and Ritual among Shahsevan Nomads of Northwestern Iran*, London, 1979 は実地調査にもとづいたシャーフセヴァン族社会の分析であり、同じ著者の "Shahsevan in Safavid Persia", *B. S. O. A. S.*, XXXVII, 1974 は、この集団の起源に関する歴史的研究、Shāhsevān (Qarāqūyūnlūhā-Aqquyūnlūhā), *Barrasihā-ye Tārikhī*, Vol. III, Nos.5 は、トルコマン族のイラン移住から二〇世紀初頭に至るシャーフセヴァン族社会の歴史的概略を示したものである。また、Б. М. Шамиладзе, *Хозяйственно-культурный и социально-экономические проблемы скотоводства Грузии — Историко-экономическое исследование*, Тбилиси, 1979 には、グルジア国内の種々の牧畜について述べられている。これによると現在グルジア国内で大規模な遊牧が行われているのはトビリスィの南方、アハルツィへの周辺、ミンゲチャウル湖の北岸の三個所で、いずれもクル河本流域である。

(26) イル＝ハン国末には、国初に存在したであろう厳密な十進法にもとづいた部隊編成は崩れていたように思える。アブーサイドの後に千人隊（ヘザーレ）にかわって部隊（コション）の部が用いられるようになったのは、十進法にもとづいた部隊の呼称が兵員の実数を示し得なくなったからではあるまいか（間野英二「モグーリスターン遊牧社会史序説」『西南アジア研究』一七、二六頁、羽田正「サファヴィー朝の成立」『東洋史研究』三七巻二号、二一六頁参照）。

(27) 本稿で知り得たグルジスターンにユルトを有していた千人隊、万人隊の司令官の地位の継承関係を次図に示した。

補註

(28) アゼルバイジャン・ソヴィエト社会主義共和国におけるモンゴル語地名研究には以下のものがある。Гейбулдаев, Г. А., Словарь географических терминов Азербайдж-

ана,” “*Известия АН Азерб ССР, серия история, философия* и *права*,” 1973, № 2 ; он же, К происхождению некоторых этнотопонимов Азербайджана (Сумгаит, Джорат, Зунут, Орият, Тангыт, Чиркин) “*Доклады АН Азерб ССР*” , 1975, № 2; он же, Монгольские топонимы в Азербайджане, “*Известия АН Азерб ССР, серия истории, философии и права*”, 1981, № 3; Гулиева, Л Г., Термин «новур» в топонимии Азербайджана, “*Материалы научной конференции посвящению изучению топонимов Азербайджана,*” Баку, 1973; Гусейнзаде, Г. А., Об этнонимах Апшеронского полуострова Джорат, Сарай и Сумгайт, “*Советская Тюркология*”, 1973, № 3

(29) カナーヤ (Canard, D., A propos de la traduction d'un passage de l'histoire universelle de Vardan sur les luttes entre Mongols d'Iran et Mongols de la Hord d'or, “*Revues des Etudes arméniennes*”, V, 1968, pp. 315–322) はずくヒ—Dhahabī (Тизенгаузен, В., *Сборник материалов относящихся к истории Зоротой орды*, т. 1, 201-202, СПб, 1884) 及びヨーニーニー (al-Yūnīnī, *Dhail Mirātu' zamān*, vol. 2, Haidarabad, 1954, p. 365) によって アゾガ・くンはクル河の右岸にトビリスくからK.sīsī まで、本道の砦を建て、百人隊毎に二三三メ十ドルの作業を割り当て、前衛としてDughān をそこに派遣して監視したらせ、そこで冬営をさたとする。

引用文献略号

Ahrī, Abū Bakr al-Quṭbī al-, *Ta'rīkh-i Shaikh Uwais*, Ed. and tr. J. B. Van Loon, The Hague, 1954

Allen, W. E. D. and P. Muratoff, *Caucasian Battlefield*, Cambridge 1953

Banākātī, Fakhr al-Dīn, *Ta'rīkh-i Bānākatī*, ed., J. She'āl, Tehrān, 1348

Boyle, J. A., “Dynastic and Political History of the Il-khāns“, *The Cambridge History of Iran*, vol. V, (pp. 352–354), Cambridge, 1968

Brosset, M. F., *Histoire de la Géorgie*, t. I-i, S.-Petersbourg, 1849

Dulaurier, E., “Les Mongols d'après historiens arméniens”, *Journal Asiatique*, 1852, Jan.-Juin, 191–255 426–508; Juillet-Dec., 1860, 273–322

Hafiẓ-i Abrū, *Dhail-i Jāmi' al-Travārīkh*, Ed. by Khān-Bābā Bayānī, Tehrān, chāp-i dovvom 1350

Hakobian, V. A., *Manr Zhama nagrut'ynner, XVIII–XVIII DD., I*, Erevan, 1951

Hayton, *La Flor des Estoires d'Orient*, (*Recueilis des Historiens des Croisades, Documents Arméniens*, II, Paris, 1906, pp. 113–235, ラテン語訳 pp. 255–367

Howorth, H. H., *History of the Mongols*, London, 1880

Juvainī, 'Alā' al-dīn 'Ata'-Malik, *Ta'rīkh-i Jahān Gushā'*, Ed., Mīrzā Muḥammad Qazwīnī, vol. I, Leiden and London, 1912

———, tr. J. A. Boyle, *The History the World-Conqueror*, vol. I, Manchester, 1958

Lang, D. M., "Georgia in the Reign of Giorgi the Brilliant", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, XII, 1955

Le Strange, G., *Lands of Eastern Caliphate*, London, rep. 1966

Manandian, H. A., *The Trade and Cities of Armenia in Relation to ancient world Trade*, Lisbon, 1965

Minorsky, V., *Studies in Caucasian History*, London, 1953

Mustaufī, (Ḥamdallāh Mustaufī Qazwīnī), *Nuzhat al-Qulūb*, Ed., M. Dabīr Siyāqī, Tehrān, 1336

———, (T. C.) Ta'rīkh-i Guzīda, Ed., A. Nabāī, Tehrān, 1339

Nabāī, Abū al-Faẓl, *Chūpānīyān dar Ta'rīkh-i Ilkhānīyān yā Tārīkh-i Āl-i Chūpān*, Tehrān, 1352

d'Ohsson, C. M., *Histoire des Mongols*, The Hague and Amsterdam 1834–35; 佐口透『モンゴル帝国史』I–VI, 1967–9年

Qāshānī, Abū al-Qāsim 'Abd Allāh b. Muḥammad al-, *Ta'rīkh-i Ūljāitū*, Ed. Mahīn Hamblī, Tehrān, 1348

Samarqandī, Kamāl al-Dīn 'Abd al-Rassāq, *Māṭla' sa'idaini va Majma' baḥraini*, qismat-i avval, Ed., 'Abd al-Ḥusain Navāī, Tehrān' 1353

Vaṣṣaf (Vaṣṣaf-i Ḥaẓrat), Sharaf al-Dīn 'Abd Allāh, *Kitāb-i tajziyat al-amṣar wa tazjiyat al-a'ṣar* (*Kitāb-i Vaṣṣaf*) Bombay, 1269 (1852/3), rep. Tehrān, 1338

Ализаде А, А., *Социально-экономическая и политическая история Азербайджана XIII-XIV* вв. Баку, 1956

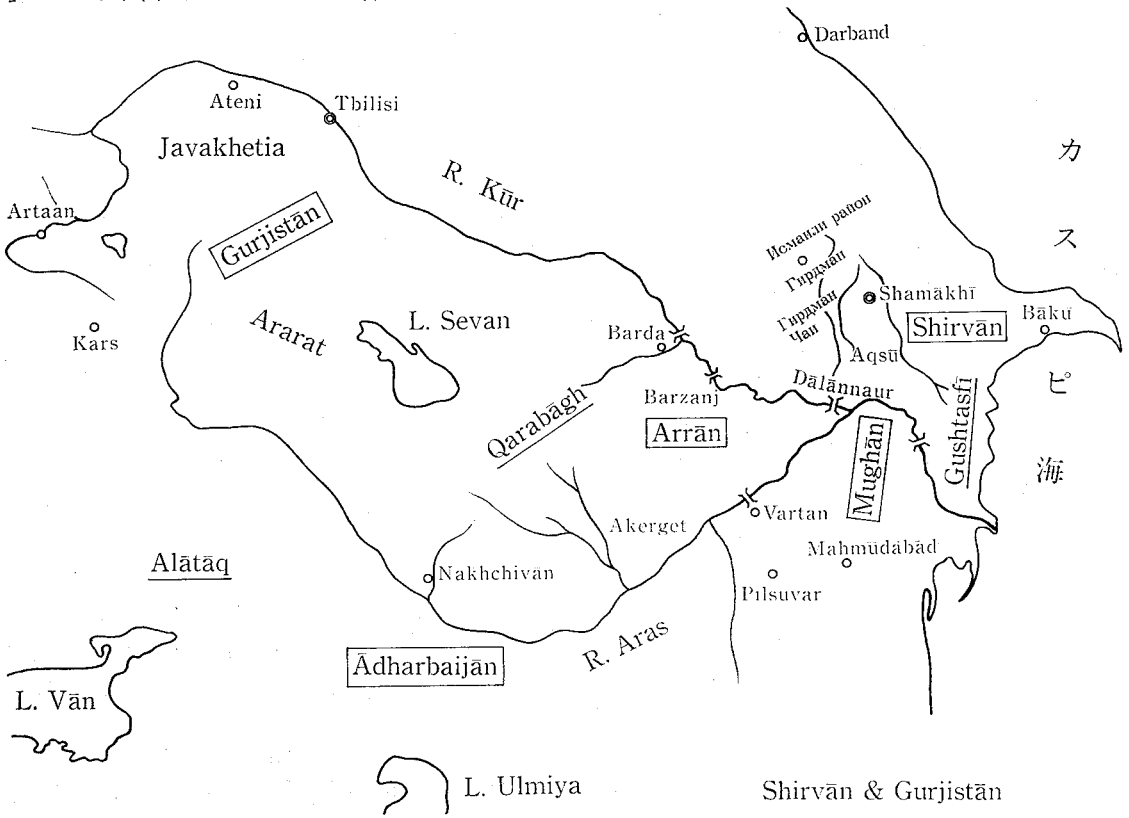
Патканов, К. П., *История Монголовъ по армянскимъ источникамъ*, вып. 1, 1873, С- Петербургъ

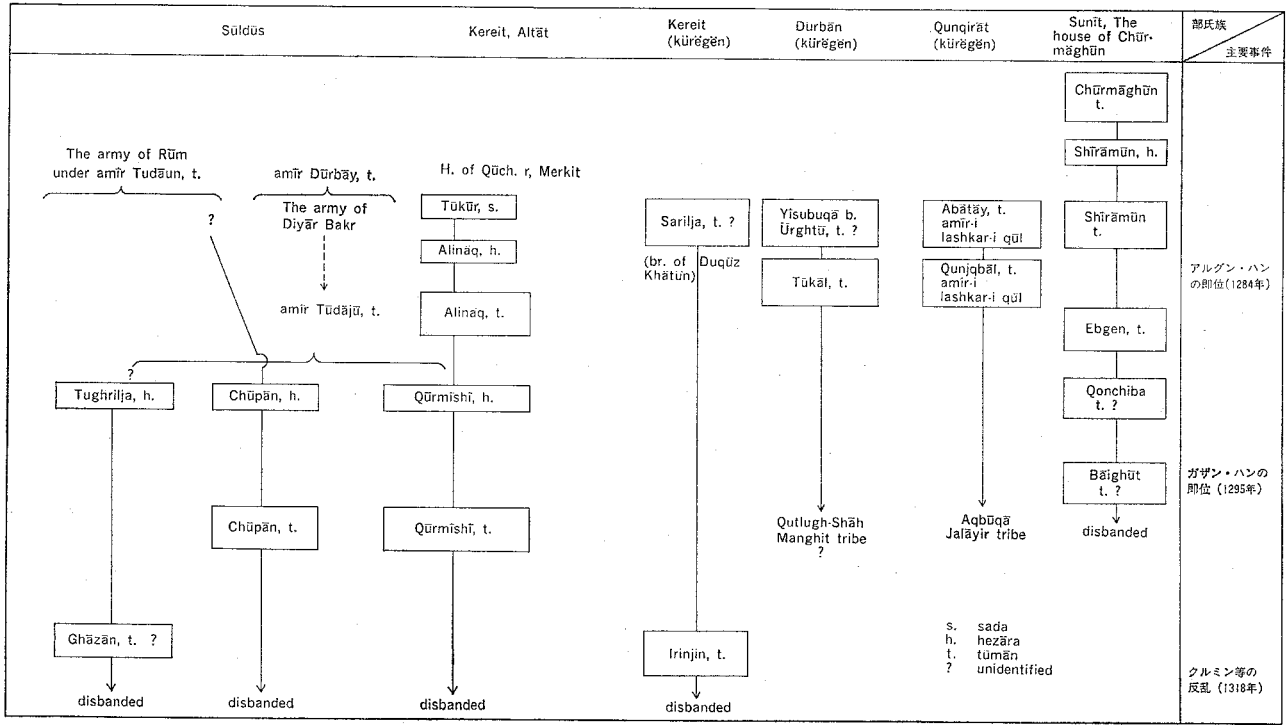
Рашид ад-дин Фаздуллах, *Джами-ат-Таварих*, А. А. Али-заде, сост., т. I-i, Москва, 1975; т. III, Баку, 1957

志茂碩敏「Ghāzān Khān 政権の中核群について—Īl-khān

国史上におけるGhāzān Khān 政権成立の意義—」『アジア・アフリカ言語文化研究』18号, 1979

付記　本稿の骨子は、一九七八年十一月、アジア文化研究会で発表し、列席された志茂碩敏氏、花田宇秋氏に御批判をいただいたので、ここに謝辞を述べる。


カスピ海
Darband
Ateni
Tbilisi
Javakhetia
R. Kūr
Artaan
Gurjistān
Kars
Ararat
L. Sevan
Barda
Qarabāgh
Barzanj
Arrān
Akerget
Nakhchivān
Alātāq
L. Vān
Ādharbaijān
R. Aras
Исмаили район
Гирдман
Гирдман чай
Shamākhī
Shirvān
Bākū
Aqsū
Dālānnaur
Mughān
Gushtasfī
Vartan
Mahmūdābād
Pilsuvar
L. Ulmiya
Shirvān & Gurjistān



The armies in Gurjistän